

「主体的・対話的で深い学び」の 実現に向けた授業改善 【実践編】



平成 31 (2019) 年 3 月
栃木県総合教育センター

はじめに

生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、人工知能の発達などの社会的変化は加速度を増し、先を予測することが困難な時代になっています。このように変化の激しい時代だからこそ、子どもたちによりよい社会や幸福な人生の創り手となれるような資質・能力を身に付けることが求められています。

小・中学校の新学習指導要領が平成 29(2017)年 3 月に告示され、各教科の目標は、育成を目指す資質・能力の三つの柱に再整理されて示されました。そこに示された資質・能力を育成するに当たり必要となるのが、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善です。小・中学校においては、本年度からの移行措置及びその後の全面実施を見据えて、具体的な取組に着手しているところかと思えます。

こうした状況を受け、当センターでは、昨年度から「主体的・対話的で深い学び」に関する調査研究（小・中・高の各学校段階）に取り組み、『「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善【理論編】』を作成しました。【理論編】では、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」のそれぞれの学びが実現できた子どもの姿の例と共に、国語科、社会科・地理歴史科・公民科、算数科・数学科、理科、外国語活動・外国語科（英語）の各教科等において、それらの姿につながる教師の手立ての例を示しました。

そして、今年度は、昨年度の調査研究を踏まえ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の視点から改善した授業の実践例を中心に【実践編】として本冊子をまとめました。研究協力委員による授業実践事例を通して、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の各視点から授業改善をどのように図っていくかをお伝えしたいと考えています。『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』に「(前略) 単元や題材など内容や時間のまとまりを見通しながら、児童の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと。」とあるように、本冊子では、単元や題材の構成を工夫し、児童生徒に身に付けさせたい資質・能力の育成につながる具体的な教師の手立て等をまとめました。【理論編】とともに「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の一助としてぜひ御活用ください。

最後になりますが、本冊子の作成に当たり、御協力いただきました関係市町教育委員会並びに関係小・中学校及び研究協力委員の皆様には、厚くお礼申し上げます。

平成 31(2019)年 3 月

栃木県総合教育センター所長
大 森 亮 一

目 次

はじめに

第1章 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めるために

- 1 なぜ「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められているのでしょうか? 2
- 2 授業改善の三つの視点について 3
- 3 授業改善の進め方 6

第2章 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の実際

- 授業実践1 小学校 第3学年 国語科12
- 授業実践2 小学校 第6学年 国語科16
- 授業実践3 中学校 第1学年 国語科20
- 授業実践4 小学校 第6学年 社会科24
- 授業実践5 中学校 第2学年 社会科28
- 授業実践6 小学校 第3学年 算数科32
- 授業実践7 小学校 第5学年 算数科36
- 授業実践8 中学校 第2学年 数学科40
- 授業実践9 小学校 第5学年 理 科44
- 授業実践10 中学校 第3学年 理 科48
- 授業実践11 中学校 第3学年 外国語科（英語）52
- 授業実践12 中学校 第3学年 外国語科（英語）56

- 参考文献60

第1章

「主体的・対話的で深い学び」の 実現に向けた授業改善を進めるために

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善がなぜ求められているのか、授業改善の三つの視点である「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」とはどのような視点なのか、そして、どのように授業改善を進めていけばよいのかについて解説します。

1

なぜ「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められているのでしょうか？

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている社会的背景として、生産年齢人口の減少やグローバル化の進展等により、これからの社会が急速に変化し予測困難な時代となることが挙げられます。

平成 28（2016）年 12 月に出された中央教育審議会答申では、これからの社会を生きるために必要な力である「生きる力」をより具体化した資質・能力を三つの柱に整理した上で、子どもたちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けられるようにするため、子どもたちの学びの質を重視した授業改善に向けた取組を活性化していくことの重要性が述べられています。

つまり、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善は、これからの時代を生きる子どもたちに必要な資質・能力を育むために求められているのです。



「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）補足資料（中央教育審議会 平成 28 年 12 月）より



「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善は、これまでの実践を否定して新しい指導方法を導入しなければならないものであると捉える必要はありません。また、授業の方法や技術の改善のみを意図するものでもありません。これまでに積み重ねられてきた優れた実践を踏まえながら、子どもたちに求められる力を育むために、子どもや学校の実態、指導の内容に応じて授業の工夫改善を重ねていくことが大切です。

2

授業改善の三つの視点について

「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」は必ずしも1単位時間で全てが実現されるものではありません。単元（題材）など内容や時間のまとまりの中で指導内容のつながりを意識しながら学びの質を高めていく工夫が大切です。そのために、現在既に行われている学習活動の過程を「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点から捉え、子どもたちが習得した概念や思考力等を手段として活用・発揮させながら学習に取り組み、その中で資質・能力の活用と育成が繰り返されるような指導を工夫していくことが求められています。

ここでは、授業改善の三つの視点である「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点について確認します。

主体的な学び の視点

学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているかという視点。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』（平成29年7月）より



「主体的な学び」の視点からの授業改善では、子どもたち自身が、興味をもって積極的に取り組むだけでなく、今学習していることがどのような意味をもっているのか、何を目指しているのかを認識し、これまでの学習を振り返りつつ、見通しをもって学習活動に取り組めるようにしていくことが重要です。

「主体的な学び」が実現できた子どもの姿として、例えば、以下のような学びの姿が考えられます。

- ・ 興味や関心を高めている
- ・ 見通しをもっている
- ・ 自分と結び付けている
- ・ 粘り強く取り組んでいる
- ・ 振り返って次へつなげている



『「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善【理論編】』（栃木県総合教育センター 平成30年3月）による

「主体的な学び」が実現できた子どもの姿は、子どもが活発に取り組んでいるという外見上の姿だけではありません。疑問を感じたり、見通しをもって学びに向かったり、うまくいなくても粘り強く取り組んだり、学びの意味を自覚したりする姿も「主体的な学び」が実現できている姿と捉えることができます。

対話的な学び の視点

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているかという視点。

『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』（平成29年7月）より



「対話的な学び」の視点からの授業改善では、対話などの活動そのものを取り入れることが目的ではありません。知識や技能の定着とともに、物事を深く理解するために、子ども同士や、教職員と子どもの対話等を通して、自らの考えを広げたり深めたりしていけるようにすることが大切です。「活動あって学びなし」にならないよう、注意しましょう。

「対話的な学び」が実現できた子どもの姿として、例えば、以下のような学びの姿が考えられます。

- ・互いの考えを比較している
- ・多様な情報を収集している
- ・思考を表現に置き換えている
- ・多様な手段で説明している
- ・先哲の考え方を手掛かりとしている
- ・共に考えを創り上げている
- ・協働して課題解決している
- ・教職員との対話を手掛かりとしている



『「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善【理論編】』（栃木県総合教育センター 平成30年3月）による

「対話的な学び」が実現できた子どもの姿は、子ども同士だけではなく、教職員、地域の人々、職業人、先哲の考え方など多様な他者との対話を通して現れるものです。その際、自分の思いや考えを伝えようとしたり、他者の意見や考え方に触れ、自分の考えを見直そうとしたりすることができるように、教師が手立てを講じることが重要です。

「対話的な学び」を成立させるためには、土台として「安心して学べる環境づくり」を日頃から行っていくことが大切です。これは、学業指導（※）の考え方にも共通するものです。

※学業指導…「学びに向かう集団づくり」と「子どもが意欲的に取り組む授業づくり」の二つの側面があります。詳しくは『学業指導の充実に向けて』（栃木県教育委員会 平成24年3月）や『学業指導の充実』（栃木県総合教育センター 平成26年3月）等を御覧ください。

深い学び

の視点

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているかという視点。

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』（平成 29 年 7 月）より



「深い学び」の視点からの授業改善では、子どもたちが、これまでに学習したことなどを結び付けて物事を捉え考えることを通して、身に付けた資質・能力をさらに伸ばしたり、新たな資質・能力を育んだりしていけるようにすることが重要です。

「深い学び」が実現できた子どもの姿として、例えば、以下のような学びの姿が考えられます。

- ・ 思考して問い続けている
- ・ 知識・技能を習得している
- ・ 知識・技能を活用している
- ・ 自分の思いや考えと結び付けている
- ・ 知識・技能を概念化している
- ・ 自分の考えを形成している
- ・ 新たなものを創り上げている



『「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善【理論編】』（栃木県総合教育センター 平成 30 年 3 月）による

「深い学び」が実現できた子どもの姿は、内面の状況であるため、「主体的な学び」や「対話的な学び」に比べて捉えにくいものです。その姿を捉えることができるよう、教師は子どもを見る目を養っておくことが大切です。

【「深い学び」の鍵となる各教科等の特質に応じた「見方・考え方」】

各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方である「見方・考え方」は、各教科等における深い学びの鍵として位置付けられています。新しい知識・技能を既にもっている知識及び技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力、判断力、表現力等を豊かなものとしたり、社会や世界にどのように関わるかの視座を形成したりするために重要なものです。習得・活用・探究という学びの過程の中で「見方・考え方」を働かせることを通じて、より質の高い「深い学び」につなげることが大切です。

「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」は、子どもの学びとしては一体的に実現されたり、それぞれ相互に影響し合ったりするものです。

しかし、授業改善の視点としてはそれぞれ固有の視点であることに留意し、単元（題材）のまとまりの中で、子どもたちの学びがこれら三つの視点を満たすものになっているか、それぞれの視点の内容と相互のバランスに配慮しながら学びの状況を把握し、授業改善を図っていくことが大切です。

3

授業改善の進め方

授業改善は、子ども一人一人が単元（題材）の目標を達成することで、資質・能力を確実に身に付けていくことを目指して行うものです。

ここでは、「主体的・対話的で深い学び」の視点からどのように授業改善を進めていけばよいのか、その一例を説明していきます。

① これまでの授業を振り返り、授業改善の方向性を明らかにする

授業改善に当たり、まず、その単元（題材）で育成を目指す資質・能力は何か確認します。その上で、これまでの授業で、子どもたちに資質・能力を十分に育成することができていたかを振り返り、できていなかった場合には、課題を明らかにします。

A先生は、授業改善に当たり、今度指導する単元（題材）の目標を確認したところ、「一人一人の考えや感じ方に違いがあるという気付きを基に、自分の考えをまとめる力」が子どもたちに十分に育成できていないと感じました。

その上で、これまでの授業を振り返ってみると、話合いの場面を設定したものの、子どもたちは自分の考えを発表し合うだけで、考えが深まっていなかったことに気付きました。

A先生は、話合いを通して考えを深めるためには、友達の考えを自分の考えの形成に生かすことが大切なのではないかと考えました。そして、話合いの場面を設定する際には、子どもたちが互いの考えを聞きたいという状態になるような工夫が必要だと考え始めました。

これらのことから、A先生は、子どもたちが「友達の考えを聞きたい！」と思えるように授業改善をしていくことにしました。

A先生



「一人一人の考えや感じ方に違いがあるという気付きを基に、自分の考えをまとめる力」が定着できなかったのはなぜだろう？

話合いを通して子どもたちの考えが深まる展開になっていたのかな…。

これまでの授業では…

話合いの場面を設定したが、自分の考えを発表し合うだけで終わってしまっていた。

考えを深めるためには、友達の考えを自分の考えの形成に生かすことが大切ではないか。

友達の考えを自分の考えに生かすためには、話合いの場面で、「友達の考えを聞きたい！」という状態になるような工夫が必要ではないか。

子どもたちが、「友達の考えを聞きたい！」と思えるような授業改善が必要である。

このように、単元（題材）全体を通して育成を目指す資質・能力を確認した上で、これまでの授業を振り返り、授業改善の方向性を明らかにします。

② 三つの視点から「期待する子どもの姿」を想定する

授業改善の方向性が明確になったら、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の三つの視点から授業を見直し、「期待する子どもの姿」を想定します。そうすることで、授業改善のイメージや手立ての方向性がつかみやすくなります。

A先生は、子どもたちが「友達の考えを聞きたい！」と思えるような授業にするために、まずは「対話的な学び」の視点から授業を見直すこととし、話し合いの場面での「期待する子どもの姿」を想定しました。

対話的な学び の視点から

期待する子どもの姿

自分の考えを伝えたり、友達の考えを聞いたりして、異なる考えに気づき、自分の考えを広げようとしている。



「期待する子どもの姿」を想定したことで、それを実現するためには子どもたち自身が必然性を感じるような話し合いの場面を設定することが大切だということに気がきました。

また、A先生は、話し合いをする前に自分の考えをもたせることが大切であることにも気づき、「対話的な学び」の視点から新たな「期待する子どもの姿」を想定しました。

期待する子どもの姿

友達に伝える前に、理由や根拠を明確にして自分の考えをノートやワークシートにまとめている。



A先生は、この姿を実現するためには、話し合う前に自分の考えに理由や根拠をもたせる場面を設定する必要があるのではないかと考えました。

このように、A先生は、一つの視点から複数の「期待する子どもの姿」を想定しました。さらに、その実現のための授業改善の手立てについて考え始めました。

どのような対話の場面を設定しようかな？



自分の考えに理由や根拠をもたせるには、どうすればいいかな？

次に、A先生は、子どもたちが、「友達の考えを聞きたい！」と思えるようにするためには、自ら課題を解決したいという思いを高めながら、継続的に学習に取り組ませることも必要ではないかと考えました。そこで、「主体的な学び」の視点から「期待する子どもの姿」を想定しました。

主体的な学び の視点から

期待する子どもの姿

自分の考えを深めながら課題解決したいという思いをもって学習に取り組もうとしている。



「主体的な学び」の視点から「期待する子どもの姿」を想定したことで、A先生は、単元（題材）の導入における学習課題をつかむ場面で、学習課題の設定や提示の工夫をすることも大切だということにも気付きました。他にも、学ぶことの必要性を感じさせたり、単元（題材）の見通しをもたせたりするための教師の手立ても大切だと考えました。

さらに、資質・能力の育成につなげるには、友達の考えを聞くだけでなく、それを自分の考えやこれまでの学びと結び付けて、よりよい考えを作り上げる「深い学び」を実現していくことが大切ではないかとA先生は考えました。そこで、次のような「期待する子どもの姿」を想定しました。

深い学び の視点から

期待する子どもの姿

自分の考えを、友達の考えやこれまでの学びと結び付けて、よりよいものになっている。



「深い学び」の視点から「期待する子どもの姿」を想定することを通して、A先生は友達の考えやこれまでの学びを関連付けて自分の考えを作り上げるためには、単元（題材）全体を見通して授業を構想することが重要だと改めて考えました。

本調査研究では、「期待する子どもの姿」を想定しましたが、これらの姿を実現することが最終目標ではありません。「期待する子どもの姿」は、授業改善の手立てを構想しやすくするためのものであり、それを手掛かりにして授業改善を行うことで子どもたちの資質・能力の育成を図っていくことが大切です。

③ 「期待する子どもの姿」につながる教師の手立てを考える

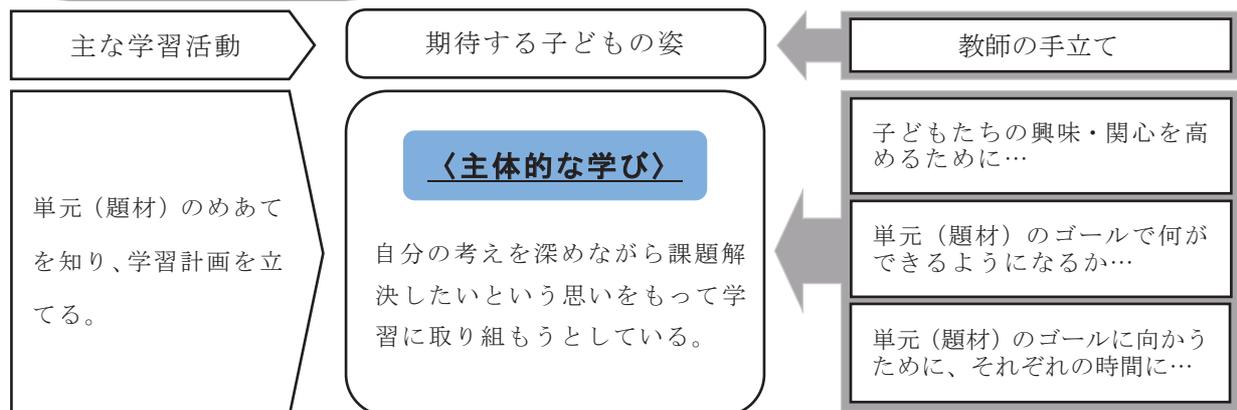
「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の三つの視点から「期待する子どもの姿」を想定し授業改善のイメージや手立ての方向性をつかんだら、それらの姿につながる教師の手立てを具体的に考えながら単元（題材）を構想していきます。

A先生は、「期待する子どもの姿」につながる教師の手立てを各学習過程の場面で考え、単元（題材）全体を構想していくことにしました。

例えば、単元（題材）の導入における「学習課題をつかむ場面」では、「主体的な学び」の視点から想定した「期待する子どもの姿」につながる手立てとして、次のような工夫をすることにしました。

- ・子どもたちの興味・関心を高めるために、映像や写真を活用し、身の回りの事象から学習課題を設定する。その際の子どもたちの反応を予想し、どのようなやり取りをすれば学びへの意欲を高められるかを考える。
- ・単元（題材）のゴールで何ができるようになるかを具体的に示し、そのためにどのように学んでいくか話し合う時間を取ることで、子どもたちが学びの必要性を感じられるようにする。
- ・単元（題材）のゴールに向かうために、それぞれの時間に何を学んでいくとよいか子どもたちが見通しをもてるような学習計画を提示する。視覚的に理解できるような掲示物を用意するだけでなく、子どもたちに何をしたらいいか問いかけ、出された案を計画に取り入れていくことで、「自分たちが学ぶ」ことを意識させる。

【学習課題をつかむ場面】



【A先生の授業構想の一部をまとめた例】

最後に、単元（題材）全体を見渡し、それぞれの学習活動が子どもたちにとって自然であるか、つながっているかを確認します。

以上が授業改善の進め方の一例です。なお、改善した授業を実践した後にも、「この授業改善によって子どもたちの資質・能力の育成は図れたのか」と教師自身が振り返ることで新たな課題を見だし、繰り返し授業改善を進めていくことが大切です。

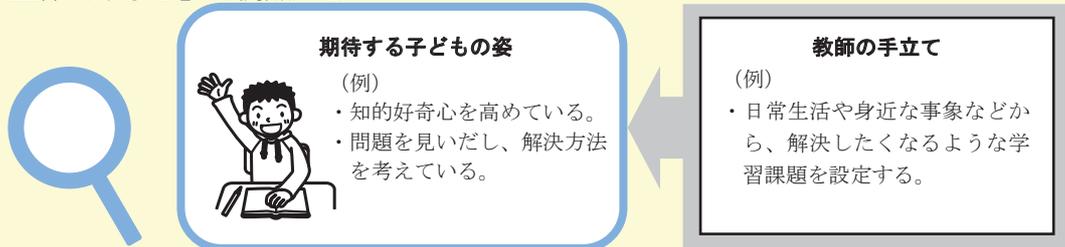
「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の三つの視点のイメージ

「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を図り、子どもたちに必要な資質・能力を育むことが求められています。しかし、子どもたちの学びとしては、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」は、相互に影響し合いながら一体的に実現するものです。

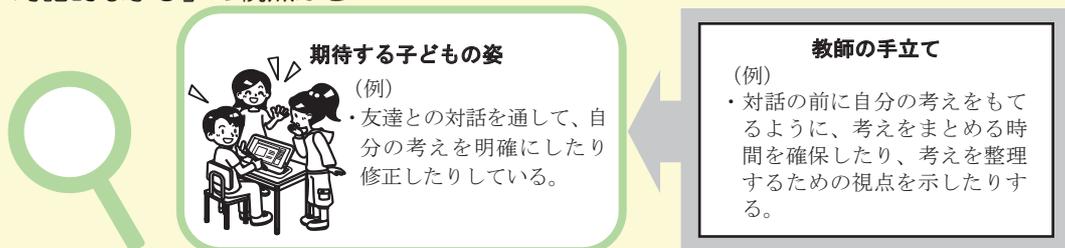


授業改善をする上では、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」は、それぞれ異なる側面から学びを捉える視点であり、固有のものです。これら三つの視点からの授業改善をしていくことが大切です。その際、単に授業のスタイルを変えることに主眼を置くのではなく、資質・能力の育成につなげることが重要です。

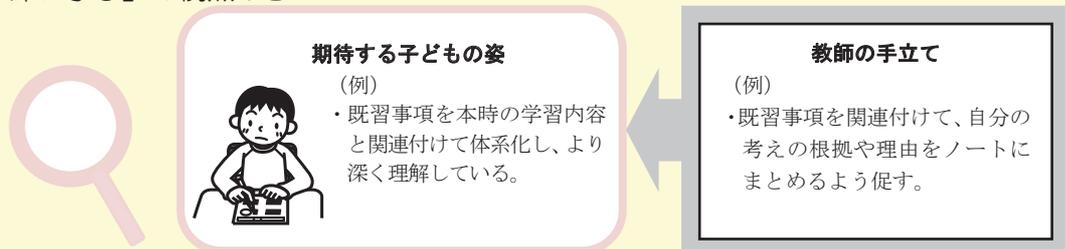
「主体的な学び」の視点から



「対話的な学び」の視点から



「深い学び」の視点から



本調査研究では、単元（題材）で育成したい資質・能力を身に付けさせるために、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の三つの視点から「期待する子どもの姿」を想定し、それにつながる教師の手立てを考え、実践しました。

第2章

「主体的・対話的で深い学び」の 実現に向けた授業改善の実際

国語科、社会科、算数科・数学科、理科、外国語科（英語）の各教科において、小学校及び中学校での授業実践の事例を紹介します。

章中の各項目解説

- ◆ 「1 これまでの課題」では、これまでに実践してきた授業を振り返ることによって見いだされた課題について述べています。
- ◆ 「2 授業改善の視点」では、単元等のねらいの達成に向けて、授業改善の三つの視点から考えた具体的な改善策について述べています。
- ◆ 「3 授業改善の構想」では、「2 授業改善の視点」で考えた改善策を基に構想した単元等の大まかな学習活動の流れと、ねらいの達成に向けて各学習過程の場面で想定される「期待する子どもの姿」とそれにつながる「教師の手立て」を示しています。
- ◆ 「4 実践の様子」では、単元等の各学習過程の場面における授業の様子を紹介しています。
 - ・「手立て」には、期待する子どもの姿につながる教師の手立ての工夫をまとめ、「子どもの姿」には講じた「手立て」によって導き出された学びの様子がまとめられています。
 - ・「本実践を通して」では、各実践の授業改善を通して子どもたちの資質・能力の向上を図るためのポイント等について解説しています。

授業実践1 小学校 第3学年 国語科

「二つの文章の特徴について対話を通して、自分の考えを広げたり深めたりする事例」

単元名 『ほけんだより』を読みくらべよう

単元のねらい

- ・教科書の例文や二つの教材文の違いを考えながら目的意識をもって読んでいる。
(国語への関心・意欲・態度)
- ・複数の教材文の表現の効果等について自分の理由や根拠を明確にして自分の考えをもち、交流を通して一人一人の感じ方の違いに気付くことができる。
(読む能力)
- ・比較した教材文の表現の違いや語句の性質・役割上の類別があることがわかる。
(言語についての知識・理解・技能)

1 これまでの課題

これまでの「読むこと」の学習においては、児童に教材の内容を読み取らせた後、自分の考えをまとめさせると、理由や根拠が不明瞭になってしまうことが多く見られてきた。また、ある単元で、二つの文章の表現の違いについて話し合いをさせたところ、個々の意見を発表するだけで互いの意見に対する疑問や考えをやり取りしながら話し合うことができないという課題があった。

2 授業改善の視点《単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

表現の効果等について考えられるよう、表現の特徴が異なる二つのリーフレットのいずれかを選び、他のクラスに掲示する紹介文を書くという言語活動を設定する。学習課題をつかむ場面で、自分が書いた紹介文によって他のクラスの人に姿勢を見直してもらおうという単元のゴールを示すことで、リーフレットを読み比べる必要性を児童が感じられるようにする。

「対話的な学び」の視点で

共通点や相違点を明らかにしながら考えをまとめられるように、「良い姿勢の利点を強調したリーフレット」と「悪い姿勢の悪影響を強調したリーフレット」の二種類を示す。また、話し合い活動をする際には、友達の見解に対する疑問や考えをやり取りしながら話し合うことができるように、付箋を使って出された意見を可視化したり、話し合いを進めていくための話型を示したりする。

「深い学び」の視点で

友達との交流で気付いたことやこれまでの学習で学んだことを生かして、表現の効果について自分の考えを深められるように、対話の後に自分の考えをまとめる時間を十分に設定したり、単元で学習したワークシート等を蓄積した学習ファイルを活用したりできるようにする。

3 授業改善の構想



4 実践の様子

ここでは、複数の教材文の表現の効果等について自分の考えの理由や根拠を明確にできるよう、特徴の異なる二つのリーフレットを示し、対話によって考えを広げ深めることができるよう付箋や話型を効果的に活用させるための指導の工夫について紹介する。

【学習課題を追究する場面で】

手立て

明確な違いのある二種類のリーフレットを用意する

【リーフレット①】

右の絵は、正しいすわり方をあらわしたものです。良いしせいでいると、体や目がつかれを感じにくくなり、長い時間すわりつづけることができます。また、集中力が高まり～

〔良い姿勢の利点を強調したリーフレット①〕

【リーフレット②】

右の表は、「しせいの悪い子がふえている」と感じているかどうか、小学校の先生にアンケートをとったものです。～悪いしせいでいると、体がいたくなったり、つかれを感じたり～

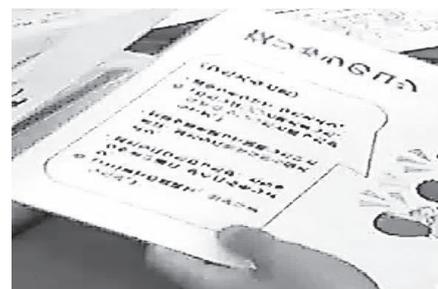
〔悪い姿勢の悪影響を強調したリーフレット②〕

付箋や話型を活用する



表現の効果を書いた付箋を根拠となる文やイラスト等の近くに貼る

○対話する際に、表現や構成に着目し、意見の根拠がどこにあるかを可視化して話合いが進められるように、二種類のリーフレットの共通点や相違点をまとめたワークシートと付箋を活用するよう指示する。



〔「交りゅうのコツ」と題した話型〕

○自信をもって対話することができるように、「つたえるとき」「きくとき」を示した話型「交りゅうのコツ」を用意し、対話する場面で活用するようにした。

子どもの姿



〔グループでの話合いの様子〕

二種類のリーフレットの共通点と相違点をワークシートにまとめた後、それぞれの表現の効果を付箋に書き出し、根拠となる表現に貼ることで、自分の考えを明確にすることができた。

また、「交りゅうのコツ」を手元に置いて対話することで、自信をもって対話し、友達の考えの良さを認める発言や質問をする姿が多く見られ、自分の考えを広げたり深めたりすることができた。

(以下のCは子ども)

- C1：私は①を選びました。…ぱっと見て詳しくて、どうすればいいのかが分かるからです。
C2：「ぱっと見て分かる」というのは、この文章とイラストのことですか？
C1：そうです。こことこのことです。
C3：〇〇さんのこの付箋、イラストと図の良さが分かりやすく書かれていると思います。

他にもこんな工夫を・・・

【学習課題をつかむ場面で】

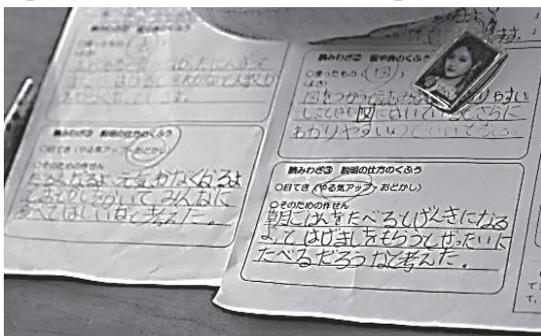


【課題カードの提示】

単元を通した課題（目標）の明確化

学習の目的や課題を理解できるように、課題カードを提示しながら、何のためにリーフレットの紹介文を書くのかを説明した。児童は、「他の教室に貼られるんだ、しっかり選ばないと！」「どっちが分かりやすいかな？」「よく読んで考えないと！」等、学習への興味・関心を高めるとともに、相手意識や目的意識をもって学習に臨むことができた。

【学習課題を追究する場面で】



【「読みわざ」から文を考察】

読み比べるための視点を示す

読み比べるための視点として、①取り上げられている事柄は何か、②図や表はどのような効果があるのか、の2点を示した。さらに児童から二つのリーフレットの特徴を表すキーワードとして「やる気アップ」と「おどかし」という言葉が出てきたので、これらも③特徴を表す視点として示した。これら三つの視点を「読みわざ」としてワークシートに示すことで、児童は文章の効果を具体的に考えることができた。

これまでの学習内容を掲示する

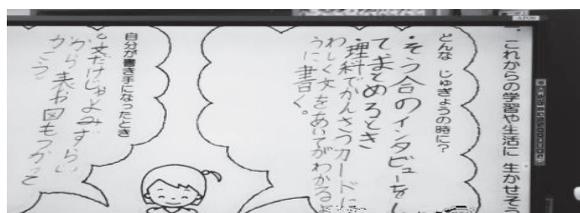
リーフレットの表現の効果について、自分の考えをまとめる際、これまでの学習内容を手掛かりとできるように、学習ファイルや教室に掲示してあるこれまでの学習内容が書かれたワークシートの拡大図を活用するよう指示をした。

児童は、表現の効果について学んできたことを掲示されたワークシートや対話でメモした内容等を確認し「おすすめの文」をよりよくするにはどうしたらいいか考えながら書き進めることができた。



【掲示物からこれまでの学習を確認する】

【学習を振り返る場面で】



【振り返りについて全体で共有】

次の学びにつながる振り返り

学習して身に付けた力を児童が自覚できるように振り返る視点を明確に示した振り返りシートを用意した。

児童の振り返りには、「総合のインタビューで生かせそう」「理科の観察カードを分かりやすく書くときに生かせそう」と表現の効果について学んだことを他教科の学習に生かそうとする記述が見られた。

本実践を通して



特徴に違いのある二つのリーフレットを比較して読む活動において、教師が用意した「読み比べるための視点」だけではなく、児童が考えた特徴を表す視点も示したことで、表現の効果についてより深く考えることができました。さらに、対話の際に考えを明らかにする手立てとして付箋や話型を有効に活用することが、自信をもって対話することにつながりました。本事例での授業改善により、児童は複数の根拠から文章の表現の効果について自分の考えを形成することができました。

授業実践2 小学校 第6学年 国語科

「複数の作品の優れた叙述について自分の考えをもち、他者との対話を通して新たな視点で作品を読み深める事例」

単元名 「宮沢賢治展を開こう
～紹介カードで伝える作品にこめられた思い～」

単元のねらい

- ・作者の人柄や生き方に関心をもち、作品に込められた作者の思いについて想像を膨らませながら読んでいる。 (国語への関心・意欲・態度)
- ・作品に描かれた登場人物の姿や優れた叙述について自分の考えをもち、他者との対話を通して考えを広げたり深めたりすることができる。 (読む能力)
- ・登場人物の心情を表す比喻や擬態語などの表現があることが分かる。 (言語についての知識・理解・技能)

1 これまでの課題

文学教材を扱った授業では、作品を読んで全体的な感想をまとめ、それぞれの感想を伝え合うだけの交流活動にとどまり、作品の優れた叙述について、自分の考えを深めることができないという課題がある。また、教科書教材学習後に、他の作品を読んでみようという発展的な読書へとつなげることが難しい。

2 授業改善の視点《単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

「宮沢賢治展を開いて5年生に作品を紹介する」という単元のゴールを示すことで、目的意識や相手意識を明確にし、児童が学習の必要性を感じられるようにする。また、児童が本単元で身に付ける力を常に意識して学習に取り組めるよう、単元全体の学習計画を示し、毎時間の授業で「この学習で身につける力」に関連した導入と振り返りの時間を設定する。さらに、単元の学習後の発展的な読書につながるよう、教科書教材「やまなし」とは別に児童が選んだ宮沢賢治の作品を紹介する言語活動を設定する。

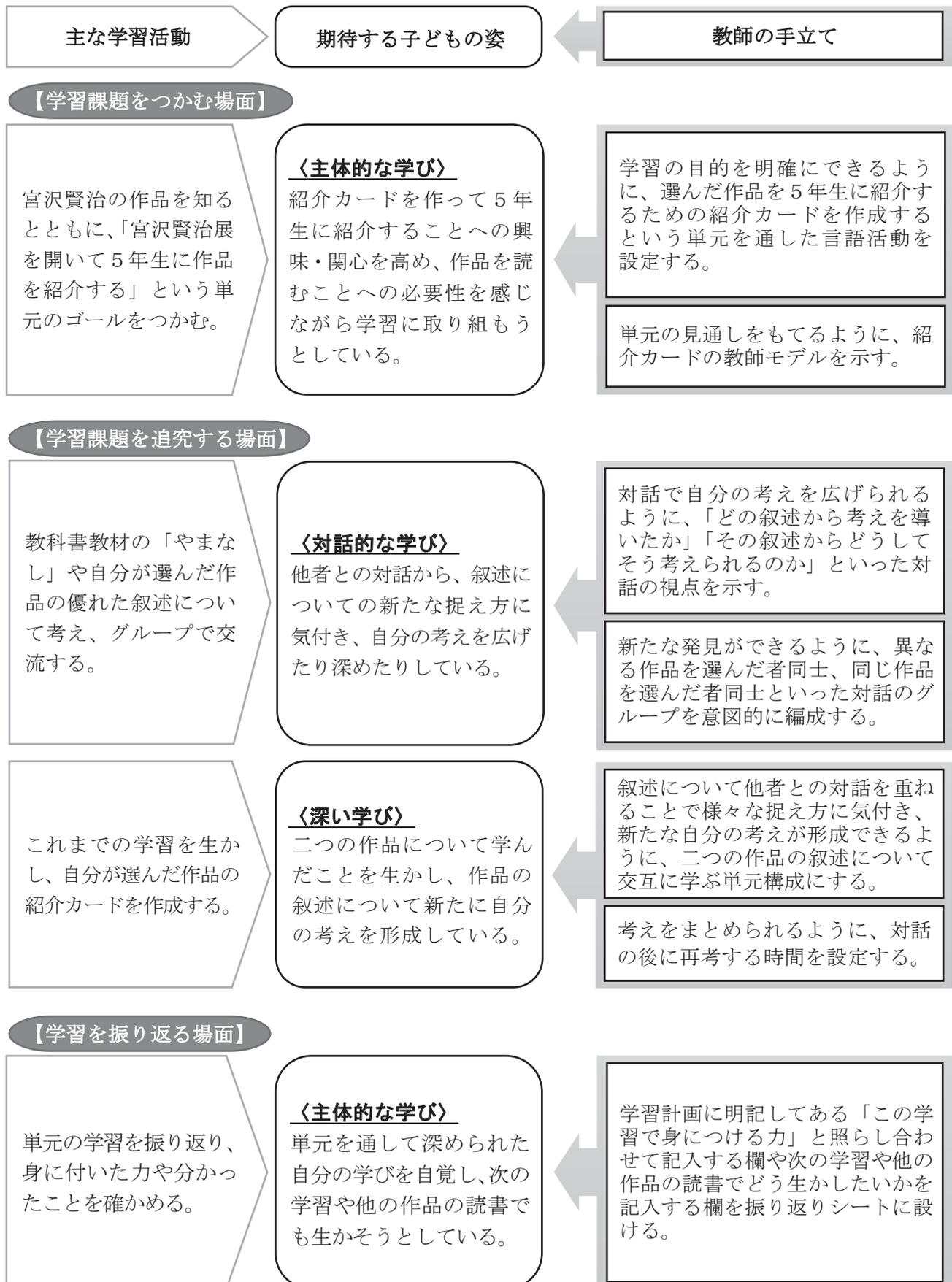
「対話的な学び」の視点で

作品に描かれた登場人物の姿や優れた叙述について自分の考えをもてるように、登場人物のどんな姿や叙述に着目して考えるとよいのか例を示す。また、対話を通して、作品に対する新たな気づきを得られるよう、異なる作品を選んだ者同士、同じ作品を選んだ者同士等、意図的にグループを編成するとともに、常に叙述に着目して対話するよう指示をする。

「深い学び」の視点で

教科書教材「やまなし」で学習したことを生かして、登場人物の姿や叙述について自分の考えを深められるよう、「やまなし」と自分が選んだ作品を交互に読み進める単元構成にする。また、対話での気づきを基に、新たな叙述や人物の姿について着目して作品を捉え直せるよう、対話の後に自分の考えを再考する時間を設ける。

3 授業改善の構想



他にもこんな工夫を・・・

【学習課題をつかむ場面で】



〔紹介カードの教師モデル（上）と完成した児童の作品（下）〕

【学習課題を追究する場面で】

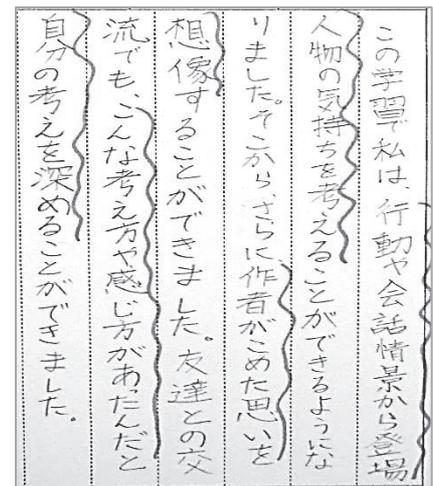


〔同じ本を選んだグループで対話する〕

【学習を振り返る場面で】

単元全体の学びを自覚して次につなげる

単元終末の振り返りでは、学習計画で示した「この学習で身につける力」を確認して振り返りカードに記入するよう指示をした。児童の振り返りカードには、「行動や会話、情景から人物の気持ちを考え、作者の作品への思いを想像できた」「交流で、違う考え方や感じ方について知り、自分の考えを深められた」「みんなの紹介カードを読んで他の作品も読んでみたくなった」等、学びの自覚と他の作品への読書につながる記入が多く見られた。



〔児童の振り返りカード〕

本実践を通して



文学教材を扱った授業では、叙述に着目して自分の考えをまとめることが大切です。本事例では、教科書教材「やまなし」だけではなく、下級生に紹介する同じ作者の本について同時に授業で扱うことで、児童は複数の作品の叙述から自分の考えをまとめることができました。さらに、相手を変えながら対話を重ねることで、多様な捉え方があることに気づき、自分の考えを新たに形成して作品を読み深めることにつながりました。

単元のゴールをモデルからイメージする

5年生に宮沢賢治の作品を紹介するために、紹介カードを作ることを伝えた。紹介カードに何を書くか、そのためにどう作品を読んでいくかをイメージし、学習の見通しがもてるように教師モデルを提示した。

児童は5年生に紹介することを知り、「どの作品を紹介しようかな」「どんな思いがこめられているのか早く考えたい」などの感想をもち、学習に対する意欲の高まりが見られた。

対話のグループを意図的に編成する

同じ作品を選んだ児童同士で交流することで、一つの作品でも、取り上げる叙述に違いがあったり、同じ叙述でも考えが違ったりするなど、多様な捉え方があることに気付けるようにした。

児童は、対話を通して「同じ表現でもいろいろな読み方があるんだね」「想像した賢治の思いは同じなのに、根拠となった表現が違うって不思議」といった新たな気づきを生み出すことができた。

授業実践3 中学校 第1学年 国語科

「複数の古典作品に描かれている先哲の考え方を手掛かりに、自分の考えを広げたり深めたりする事例」

単元名 「伝統文化に触れる」(『伊曾保物語』『竹取物語』『矛盾』)

単元のねらい

- ・ 古典への興味・関心を高め、古典に親しむことができる。 (国語への関心・意欲・態度)
- ・ 古典作品に描かれている古人のものの見方や考え方を捉え、自分のものの見方や考え方を広げることができる。 (読む能力)
- ・ 文語のきまりや訓読の仕方を知り、音読を通して古典特有のリズムを味わうことができる。 (言語についての知識・理解・技能)

1 これまでの課題

古典の世界への興味・関心を高め、作品に描かれている古人のものの見方や考え方を捉えて自分の考えをまとめさせる指導に課題がある。また、生徒は古語への馴染みが薄いため、古典を読むことの興味・関心を高めるための工夫が必要だと感じている。

2 授業改善の視点《単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

古典の世界への興味・関心を高められるように、学習活動をつかむ場面で、生徒達が知っている身近な作品を取り上げる。より多くの古典作品に親しめるよう「三つの古典作品(『伊曾保物語』『竹取物語』『矛盾』)に関連した作品の紹介カードを作成する」という単元を通じた言語活動を設定する。さらに、現代語と違った古語の響きについて知的好奇心を高めるために、様々な形態で音読する活動を取り入れる。

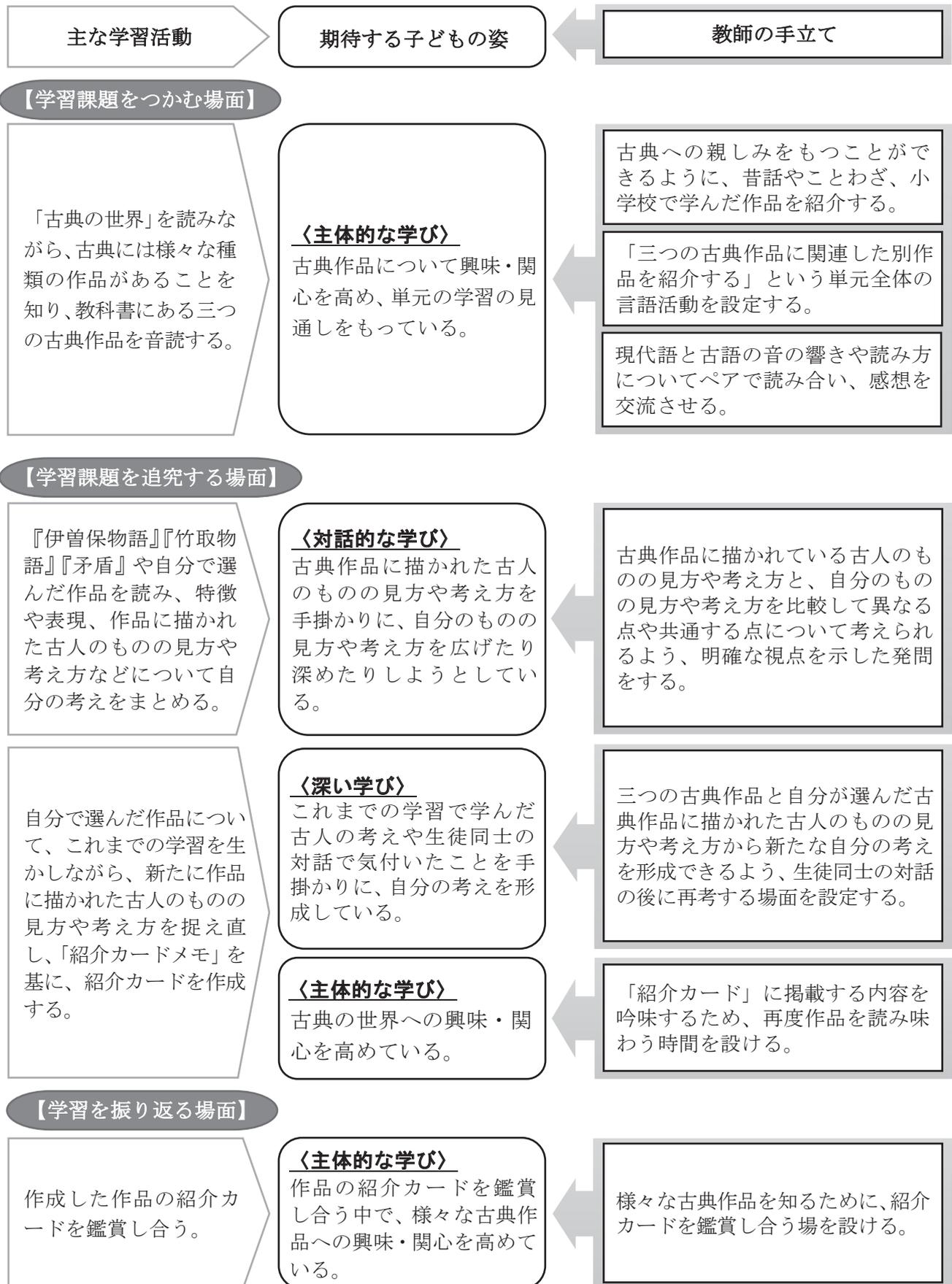
「対話的な学び」の視点で

三つの古典作品に描かれている古人のものの見方や考え方を捉えることができるように、現代の社会や自分の考えと比較して違うところや同じところはどこかといった視点を明確にした発問を工夫する。また、自分が紹介する古典作品に描かれている古人のものの見方や考え方について自分の考えを整理してまとめられるように工夫した「紹介カードメモ」を用意する。さらに、古人のものの見方や考え方の捉え方の違いを知ることができるよう、「紹介カードメモ」を基にした生徒同士の対話の場面を設定する。

「深い学び」の視点で

三つの古典作品での学びを生かし、自分が選んだ作品に描かれている古人のものの見方や考え方を手掛かりに、新たに自分の考えを形成できるよう、生徒同士の対話の後に再考する場面を設定する。

3 授業改善の構想



4 実践の様子

ここでは、三つの古典作品で学んだことを生かして、新たな古典作品に描かれている古人のものの見方や考え方について捉え、自分のものの見方や考え方を広げたり深めたりできるように、「紹介カードメモ」を基に自分の考えをまとめ、対話を通して再考するための指導の工夫について紹介する。

【学習課題を追究する場面で】

手立て

○三つの古典作品で学んだことを生かして、新たな古典作品を読み深められるように、次の三つのステップに分けて紹介カード作りまでの教師の手立てを考えた。

STEP1

「三つの古典作品」に関連した複数の作品の紹介カードを例示したワークシートと、自分が選んだ作品に描かれた古人のものの見方や考え方をどう捉え、どう考えたかをまとめる「紹介カードメモ」を用意する。

STEP2

作品に対する捉え方や考え方等に違いがあることに気づき、作品に描かれた古人のものの見方や考え方について自分のものの見方や考え方を広げたり深めたりできるように、グループ等での対話を複数回設ける。

STEP3

対話を通しての新たな気づきをまとめ、紹介カードに載せる内容を吟味できるように、対話の後に再考の時間を設定し、「紹介カードメモ」を基に紹介カードを作成するよう指示をする。



【複数作品の紹介カードを例示したワークシート】

子どもの姿



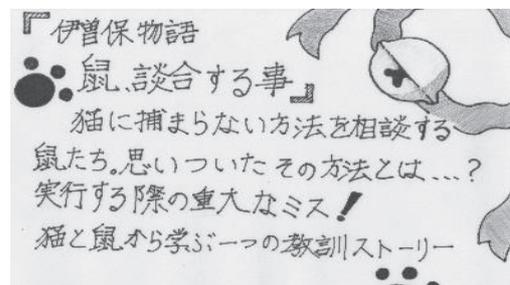
【作品を選び、「紹介カードメモ」をまとめる】



【「紹介カードメモ」を基に対話する】

生徒は、三つの古典作品で学んだ古人のものの見方や考え方について捉えたワークシート等を参考に、自分の選んだ古典作品について「紹介カードメモ」に考えをまとめていた。

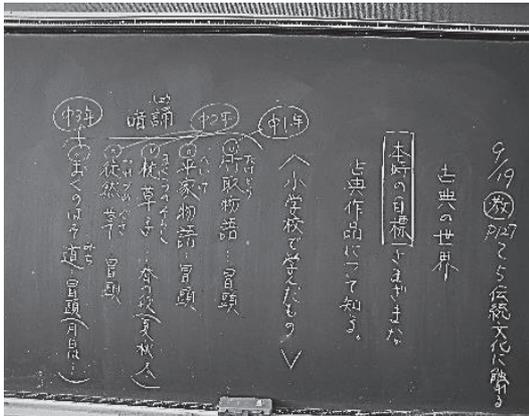
「紹介カード」を基にした対話では、「この作品って今の自分たちでもやる失敗のことが書いてあるよね」「この故事成語の内容は、ちょっと難しいから優しく言い換えるとどうなるかな？」など、互いの選んだ作品について意見を交わし、再考している姿が見られた。



【完成した紹介カード】

他にもこんな工夫を・・・

【学習課題をつかむ場面で】

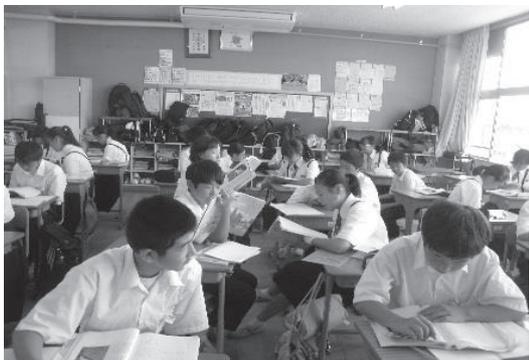


【小学校で学んだ古典作品を確認する】

古典の世界への興味・関心を高める

小学校で学んだ古典作品（「枕草子」や「平家物語」）やこれから中学校で学ぶ古典作品について、映像資料を活用して紹介した。併せて、「うらしま太郎」や「かぐや姫」といった絵本作品を見せることで、より古典作品に親しみをもてるようにした。

絵本作品を見て「なつかしい」「読んだ、読んだ」といった声を上げたり、小学校の既習作品である枕草子の「春はあけぼの」をそらんじたりする生徒が多数見られ、生徒の古典への興味・関心を高めることができた。



【ペアで音読する様子】

古典の世界に親しむ

古典の音の響きに親しみ、現代の言葉やリズムとの違いに気付くことができるよう、学習形態を変えて、繰り返し音読する活動を設定した。

ペアで音読し、それぞれの音読の感想を述べ合う活動では、「枕草子の『いとをかし』って強く言い切る感じかなあ」「共感を求めるように優しい感じで読む方がいいと思うよ」「もう少し内容について考えないと読み方が分からないね」といったように、音読をきっかけに作品の内容について深く学ぼうとする姿が見られた。

【学習を振り返る場面で】



【紹介カード鑑賞会の様子】

古典の世界を広げる

単元の最後に、それぞれが作成した紹介カードを鑑賞し合う場を設けた。その際に、「自分が選んだベスト3」と題して、鑑賞した後に気に入った作品に対する評価をノートにまとめさせた。生徒からは、「作品の山場を表現する言葉が印象的だった」「作品の情景が伝わる言葉や絵が工夫されていた」といった評価が書かれていた。

振り返りカードには、「昔話の絵本の原文を読んでみたい」「もっと、いろいろな作品を声に出して読んでみたい」などの記述が多く見られ、古典作品を読み広げていきたいという意欲を高めることができた。

本実践を通して



中1の古典の学習では、様々な古典作品を知り、親しむことが目標となります。本事例では、教師が絵本や小学校で学習した作品などを教科書の古典作品と関連付けながら扱うことで、生徒は古典が身近なものと感じることができました。また、「紹介カードメモ」を活用させた対話や、対話後に再考の場を設ける等、教師が単元の構成を工夫することで、生徒は複数の作品に描かれた古人のものの見方や考え方を捉えたり、自分のものの見方や考え方を広げたり深めたりすることができました。

授業実践4 小学校 第6学年 社会科

「比較検討の視点を明確にした対話を通して、課題への考えを深めている事例」

小単元名 「明治の国づくりを進めた人々」

小単元のねらい

- ・ 諸改革を行った明治政府に関心をもち、我が国が欧米の文化を取り入れながら近代化を進めたことを進んで調べようとしている。
(社会的事象への関心・意欲・態度)
- ・ 明治時代の人物について調べたことを比較、関連、総合し、その願いや働き、意味を考えて、文章などに表現することができる。
(社会的な思考・判断・表現)
- ・ 我が国の近代化のために活躍した人物について、必要な情報を集め、読み取り、調べたことを年表、ノートなどにまとめることができる。
(観察・資料活用の技能)
- ・ 明治政府が諸改革を行ったことを通して欧米の文化を取り入れつつ、近代化を進めたことを理解することができる。
(社会的事象についての知識・理解)

1 これまでの課題

これまでも小単元の導入時に児童の興味・関心を高める工夫をしたり、調べたことから自分の考えをもつことができるような工夫をしたりしてきた。しかし、話合いのような対話型の学習活動では、自分の考えを発表し合うだけの情報交換になってしまい、児童が対話を通して考えを深める学習になりにくいことが課題である。

2 授業改善の視点《小単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

児童にとって魅力的な学習問題（問い）を設定することで、小単元を通して学習意欲が持続し、よりよい考えを形成しようとする主体的な学びにつながると考えた。そこで、興味・関心が高められるような身近な事例から児童と一緒に学習問題（問い）や学習計画を立て、見通しをもって学習できるようにする。また、小単元を通して自分の学びの深まりを自覚できるように、毎時間、振り返りの時間を設定する。

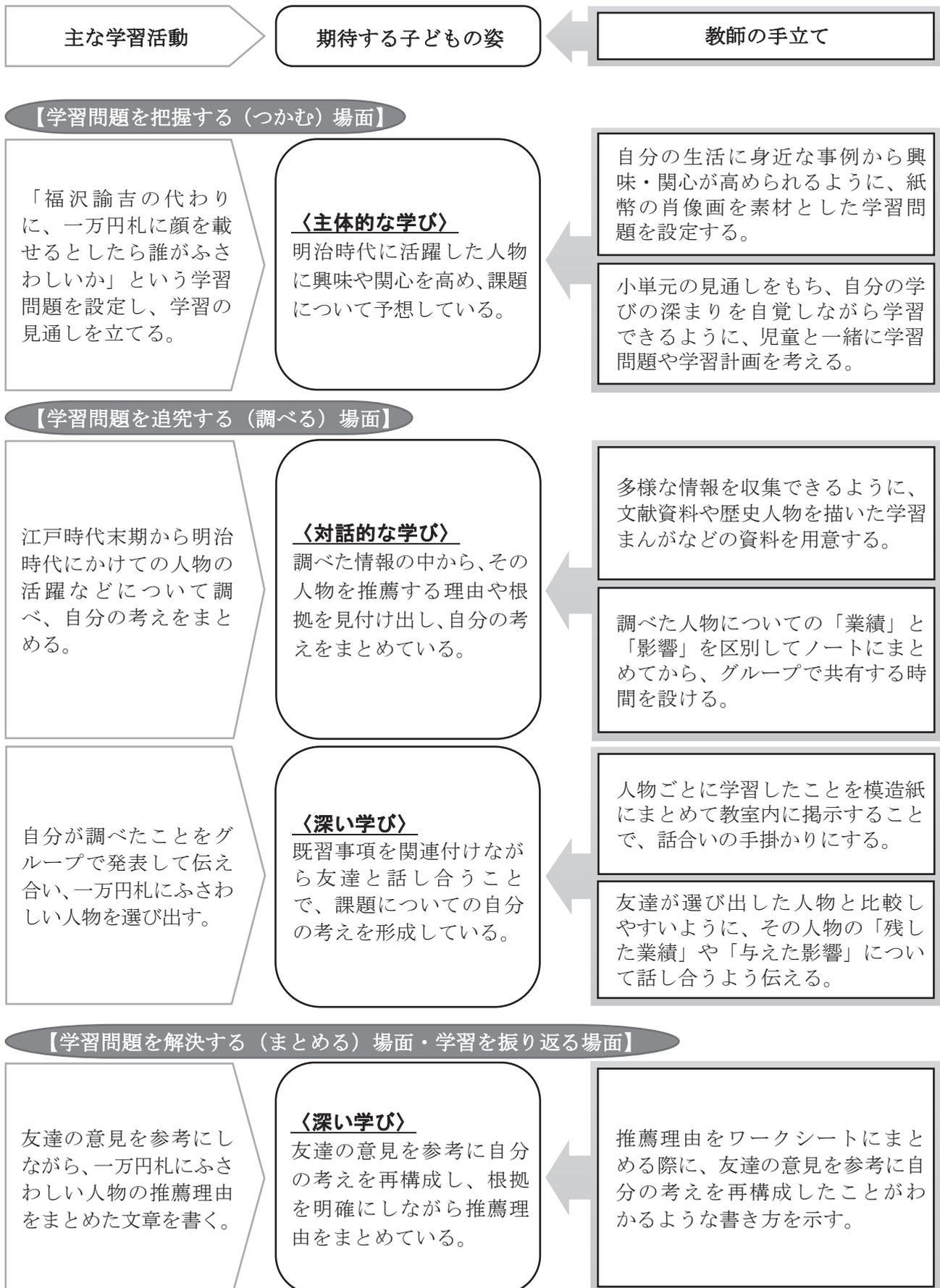
「対話的な学び」の視点で

学習問題（問い）を追究する場面で、2段階の対話を設定することで、対話の目的や内容が明確になり、考えを広めたり深めたりすることができると思った。まずは、自分の考えを形成するために、調べた情報を友達と共有しながら理由や根拠を見付け出せるような対話の場面を設定する。次に、自分の考えと友達の考えとの共通点や相違点を比較できるようにノートにまとめてから、自分の考えを再構成できるような対話の場面を設定する。

「深い学び」の視点で

調べ学習や対話の場面において、既習事項を比較、関連付けるための工夫をすることで、自分の考えを深めることができると思った。そこで、対話の場面では、理由や根拠を明確にするための話合いの視点を設定する。また、まとめの場面では、自分の意見と友達の意見を関連付けたり総合したりして根拠をまとめる書き方の工夫を示す。

3 授業改善の構想



4 実践の様子

ここでは、「児童が理由や根拠を示しながら自分の意見を述べ、友達と対話をする中で考えを深め、自分の考えを再構成できるようにする」ために、比較検討するための視点を設けて明治時代の人物を見つめるための指導の工夫について紹介する。

【学習問題を追究する（調べる）場面】

手立て

○推薦したい人物について調べていく際に、「業績」と「影響」という二つの視点を設定した。この二つの視点から人物について調べ、整理することで、自分の考えを構成する際の理由や根拠を見付け出しやすくなると思った。また、グループでの対話の場面でも、友達の推薦する人物との比較がしやすくなると思った。

○人物について調べてまとめたものを教室内に掲示しておくことで、それを手掛かりに既習事項と比較したり、関連付けたりしやすくなると思った。



【人物ごとにまとめた掲示資料】

○推薦理由をまとめる際には、自分が考えた推薦理由を書くだけでなく、「友達の意見と比べて書く」という条件を与え、話し合いを基に考えを再構成できるようにした。

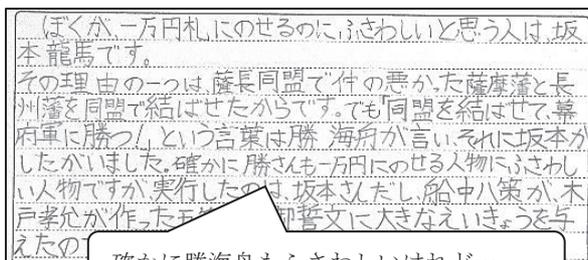
子どもの姿



私は〇〇を推薦します。
なぜなら、この人の業績は…。与えた影響は…。

【グループでの対話による比較検討の場面】

グループでの話し合いでは、自分が推薦したい人物を選んだ理由や根拠として、「業績」や「影響」を挙げながら説明することができた。「業績」や「影響」を話し合いの視点としたことで、友達が推薦した人物と比較検討しながらも、自分の推薦したい人物の業績をもう一度見つめ直すことができた。また、自分が推薦したい人物が社会に与えた影響の大きさについても再確認することができた。



確かに勝海舟もふさわしいけれど…。

【友達の意見と比較検討した後のまとめ】

推薦理由をまとめる場面では、友達の考えを比較検討したり、関連付けたりした考えをワークシートに記述する姿が見られた。

また、推薦文を書きながら、教室内に掲示してある人物ごとのまとめを見て考える児童もおり、掲示資料を手掛かりにすることで、既習事項を関連付けて考えを再構成し、思考を深めることにつながることができた。

他にもこんな工夫を…

【学習問題を把握する（つかむ）場面で】



【興味・関心が高まる学習問題の設定】

興味・関心を高める学習問題（問い）の設定

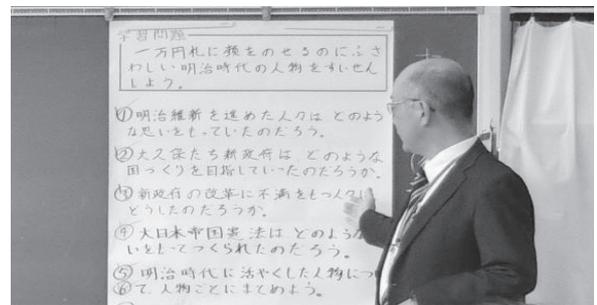
本小単元の導入で、本物の一万円札を提示した。児童は、肖像画になっている福沢諭吉の業績について学習した後、「新しい一万円札に顔を載せるのにふさわしい明治時代の人物を推薦しよう」という学習問題を立てた。

歴史上の人物に興味がある児童が多いため、生活の中で目にする紙幣の肖像画を取り上げたことで、意欲的に学習に取り組み、本小単元を通して興味・関心を持続させることができた。

問題解決の見通しをもたせる工夫

学習問題（問い）を解決したいという意欲を持続させるために、児童と一緒に考えながら学習計画を立てた。

児童は、計画表を見ながら何をどのように学ぶべきかを確認し、見通しをもちながら取り組むことができた。



【見通しをもたせる学習計画の設定】

【学習問題を追究する（調べる）場面で】



【学習まんがを活用しての情報の収集】

人物について調べるための資料の準備

人物について調べ学習を進める際の情報量が教科書や資料集だけでは少ないと感じたため、幕末から明治時代にかけての文献資料などを集めて提示した。

特に、歴史人物の学習まんがの活用は有効であった。児童にとって分かりやすい資料を与えたことで、児童は必要な情報を読み取ろうと進んで取り組むことができた。また、読書や資料の読み取りが苦手な児童にとっても、抵抗感が少なく、歴史的事実や歴史の流れを捉えることができた。

本実践を通して



社会科の授業では、主体的な学びを実現させるために、小単元を貫く魅力的な学習問題（問い）を設定したり、学習計画を児童と一緒に立てたりすることが大切です。また、調べ学習や話し合いの際には、情報を比較・検討しやすくするための工夫が大切です。本事例では、対話を通して児童の考えを深めるために、「業績」や「影響」という比較・検討の視点を示す工夫を紹介しています。児童は、二つの視点から人物を見つめ、それらを関連付けたり総合したりして自分の考えを再構成することで、明治時代の人物の願いや働きについて深く考え、近代化への影響をまとめることができました。

授業実践5 中学校 第2学年 社会科

「学んだ知識や技能を活用し、対話を通して課題を追究する事例」

小単元名 日本 の 諸 地 域 「 中 国 ・ 四 国 地 方 」

小単元のねらい

- ・ 中国・四国地方を概観する中で、特に地域間の結び付きに関心をもち、設定した課題を基に地域的特色を意欲的に追究しようとする。 (社会的事象への関心・意欲・態度)
- ・ 中国・四国地方の地域的特色を、他の地域との結び付きを中核とした考察の仕方を基に、交通網の発達に着目して多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現することができる。 (社会的な思考・判断・表現)
- ・ 中国・四国地方の地域的特色に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択し、読み取って図表などにまとめることができる。 (資料活用の技能)
- ・ 中国・四国地方について、他の地域との結び付きを中核とした考察の仕方を基に地域的特色を理解し、その知識を身に付けることができる。 (社会的事象についての知識・理解)

1 これまでの課題

「日本の諸地域」の学習においては、考察の仕方を基にして、地域的特色を追究することとしているが、諸地域の単なる地誌的な知識の習得になってしまうことがある。中核とした事象と単元を通して学んだ他の事象を関連付けて学習課題を解決し、自分の考えをまとめる活動を通して、地域的特色を理解させる単元展開になっていないことが課題である。

2 授業改善の視点《小単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

本小単元の導入部で「なぜ多額の資金を投入してまで、本州四国連絡橋をつくったのか。」という問いを設定し、学習に対する興味や関心を高める。また、本小単元の学習の手応えを感じることができるよう、小単元の終わりに、単元を通して学んできたことを振り返る時間を設定するとともに、小単元における思考の流れを確認できるように振り返りシートの工夫を行う。

「対話的な学び」の視点で

学習課題について個人で予想し、ICT等を活用して集めた情報を基に自分の考えをもってから、小グループによる意見交換を行うようにする。その後、グループごとに、話し合いで出された意見やその根拠を発表することを通して考えを深め、最終的に自分の意見をまとめられるようにする。

「深い学び」の視点で

本州四国連絡橋の評価について話し合う際に、既習事項と関連付けて考えられるように、前時までに学習した内容を地図上にまとめて可視化させる。また、小単元を通して使用するワークシートや意見交換の記録用紙を工夫することで、本州四国連絡橋の評価を考えることを通して、中国・四国地方の地域的特色の理解につながるようにする。

3 授業改善の構想

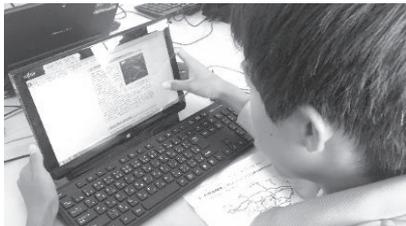


4 実践の様子

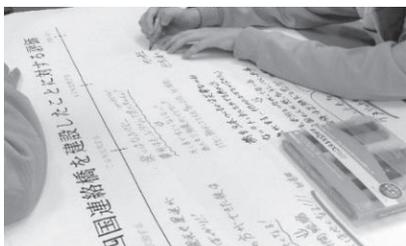
ここでは、本州四国連絡橋を建設したことに対する評価を行い、立場が違う他者との対話を通して、それぞれの意見や根拠の違いに気付き、交通網の発達が周辺地域に与える影響を他の地理的事象と関連付け多面的・多角的に考えて、自分の意見をまとめることができる指導の工夫について紹介する。

【学習課題を追究する（調べる）場面で】

手立て



〔タブレット端末で調べている様子〕



〔グループでの対話で使用した記録用紙〕

○本州四国連絡橋に対する評価を考える学習において、生徒個人が根拠をもって支持率の表明（評価）ができるようにするために、本州四国連絡橋の建設理由や影響を調べる際、タブレット端末を活用して情報を自由に調べられるようにした。

○前時に作成した、「交通」を中心に中国・四国地方に関する地理的事象をまとめたものに本州四国連絡橋のメリットとデメリットについて生徒が考えたことを記入した模造紙を教室内に掲示した。

○グループでの対話の際に使用する記録用紙に横軸を示し、左から本州四国連絡橋の建設に対しての支持率（100%支持・70%支持・40%支持・支持しない）を明記した。自分の意見が明確になるとともに、それぞれの意見が可視化され、自分の意見と他者の意見を比較して検討できるようにした。

子どもの姿

グループでの対話では、自分が考えた評価について発表するとともに、それぞれの意見を模造紙にまとめながら、その根拠について、本州四国連絡橋の建設目的や影響をまとめたワークシートを活用して中国・四国地方に関する既習事項を関連付けて対話を行う姿が見られた。他者の意見を聞きながら、橋に対する評価を様々な立場や条件から地域に与える影響を踏まえて考えている姿が見られた。

教室に掲示された模造紙には、橋の建設に対して考えたメリット・デメリットが書き出された付箋が貼られており、グループ内の対話において意見が対立した際にも、生徒たちは、模造紙の内容を確認していた。また、自分の意見と相手の意見の根拠の違いについて既習事項と結び付けて考えながら、自分の意見を再考している姿が見られた。

四国と本州の関係がわかり、
 --見方、立場と異なり、いろいろな立場から見ると、異なる所が見えたり、
 もと良いところが見つけやすくなるのが良かった。

〔ワークシートより抜粋〕



〔既習事項を確認して説明している様子〕



〔相手の意見の根拠を確認している様子〕

他にもこんな工夫を・・・

【学習課題を把握する（つかむ）場面で】



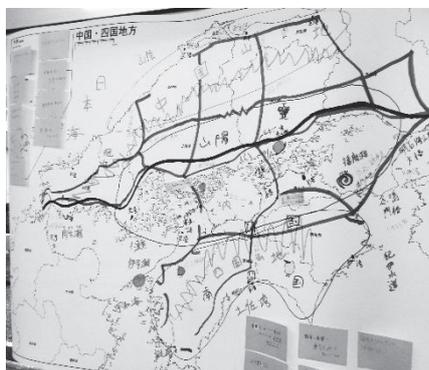
【使用したワークシート】

興味・関心を高め、課題を見いださせる工夫

中国・四国地方を概観した後、生徒の考察の視点が「交通」（本州四国連絡橋）に向くように、県庁所在地だけを示したワークシートの白地図に、政治家になったつもりで高速道路を整備する課題を与えた。

これによって生徒は、「交通」を中心に周辺地域の地理的事象を関連させる考察を行った。中国地方と四国地方の間は、どうなっているのか、どこに橋が架かっているのか疑問をもつ生徒が多かった。その後、本州四国連絡橋のルートや建設費用、建設期間を確認することで、建設した目的や地域に与える影響に関心をもつ姿が見られた。

【学習課題を追究する（調べる）場面で】



【生徒が作成した中国・四国地方の様子】

話し合いを活性化させる工夫

小単元を通して学習してきた中国・四国地方における気候、地形、産業、人口について交通網の整備を中心に、グループごとに白地図上にまとめる時間を設定した。

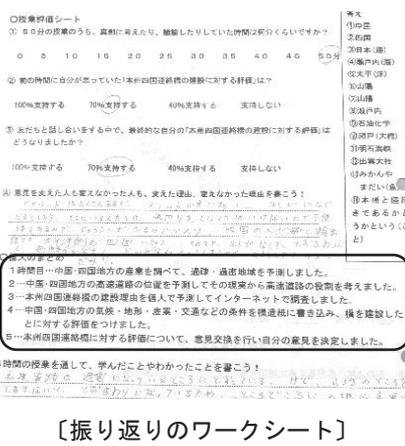
生徒は、自分でタブレット端末を使って調べた本州四国連絡橋を建設した目的や影響についての情報を基に、本州四国連絡橋の建設に対するメリットとデメリットを考え、付箋に記入し整理した。そうすることで、本州四国連絡橋を中心とした交通網と他の地理的事象の関連性について考え、橋の評価に対して自分の意見をもつことができ、積極的にグループで対話する姿が見られた。

【学習を振り返る場面で】

小単元の学習活動の可視化

小単元全体の自分の学びを評価する場面を設定し、ワークシートには、小単元の学習活動を明記した。

生徒は、小単元を通じた思考の流れを確認し、交通網の発達という視点から中国・四国地方の地域的特色を理解するとともに、交通網の発達が地域に与える影響について概念的に考える姿が見られた。



【振り返りのワークシート】



【振り返りの様子】

本実践を通して

社会科では、社会的事象に出会い、気付きや疑問から課題を設定し、課題解決に向けて諸資料を基に自分で調べて考え、対話を通して多面的・多角的な考察を行う中で、既習事項と関連付けながら自分の意見をまとめることが深い学びにつながっています。本事例では、本州四国連絡橋が地域に与えた影響を多面的・多角的に考えることを通して、対話の中で既習事項を関連付けながら、中国・四国地方の地域的特色を理解することができました。

授業実践6 小学校 第3学年 算数科

「既習内容や様々な考えをつなぎ、より確かな知識として定着を図る事例」

単元名 「小数」

単元のねらい

- ・ 小数を用いると、整数で表せない端数部分の大きさを表せるよさに気付き、小数を生活や学習に用いようとする。 (算数への関心・意欲・態度)
- ・ 小数は整数の十進位取り記数法を拡張していることを捉え、小数の仕組みや構成、加減計算の仕方を考え、表現することができる。 (数学的な考え方)
- ・ 端数部分の大きさを小数を使って表したり、 $1/10$ の位までの小数の加減計算をしたりすることができる。 (数量や図形についての技能)
- ・ 小数が用いられる場合や小数の仕組みについて知り、小数の意味や、 $1/10$ の位までの小数の加減計算の意味や計算の仕方について理解する。 (数量や図形についての知識・理解)

1 これまでの課題

小数との出会いである本単元では、これまで1単位時間で身に付けるべき力を確実に付けさせたいという思いで指導を進めてきた。そのため、1単位時間ごとに身に付けた力を関連付けて小数に関する知識をつないだり、小数に対する知識を広げたり深めたりするという指導が不十分であった。

また、日常生活で目にする身近な小数と本単元を関連付けることや、第2学年で学習した長さや体積の学習を踏まえるなど、生活や既習内容を生かした指導が不十分であった。

2 授業改善の視点《単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

児童が小数は何を表しているのかについて疑問をもち、それを解決していくという課題を見いだすことができるよう、単元の導入において身の回りにある小数で表されたものを取り上げる。その際、小数で表示するよさについて、日常生活や既習内容と関連付けて考えられるような場を設定する。単元のまとめでは、導入で抱いた課題を解決できたことを確認する活動を取り入れ、児童が自分の学びを自覚できるようにする。

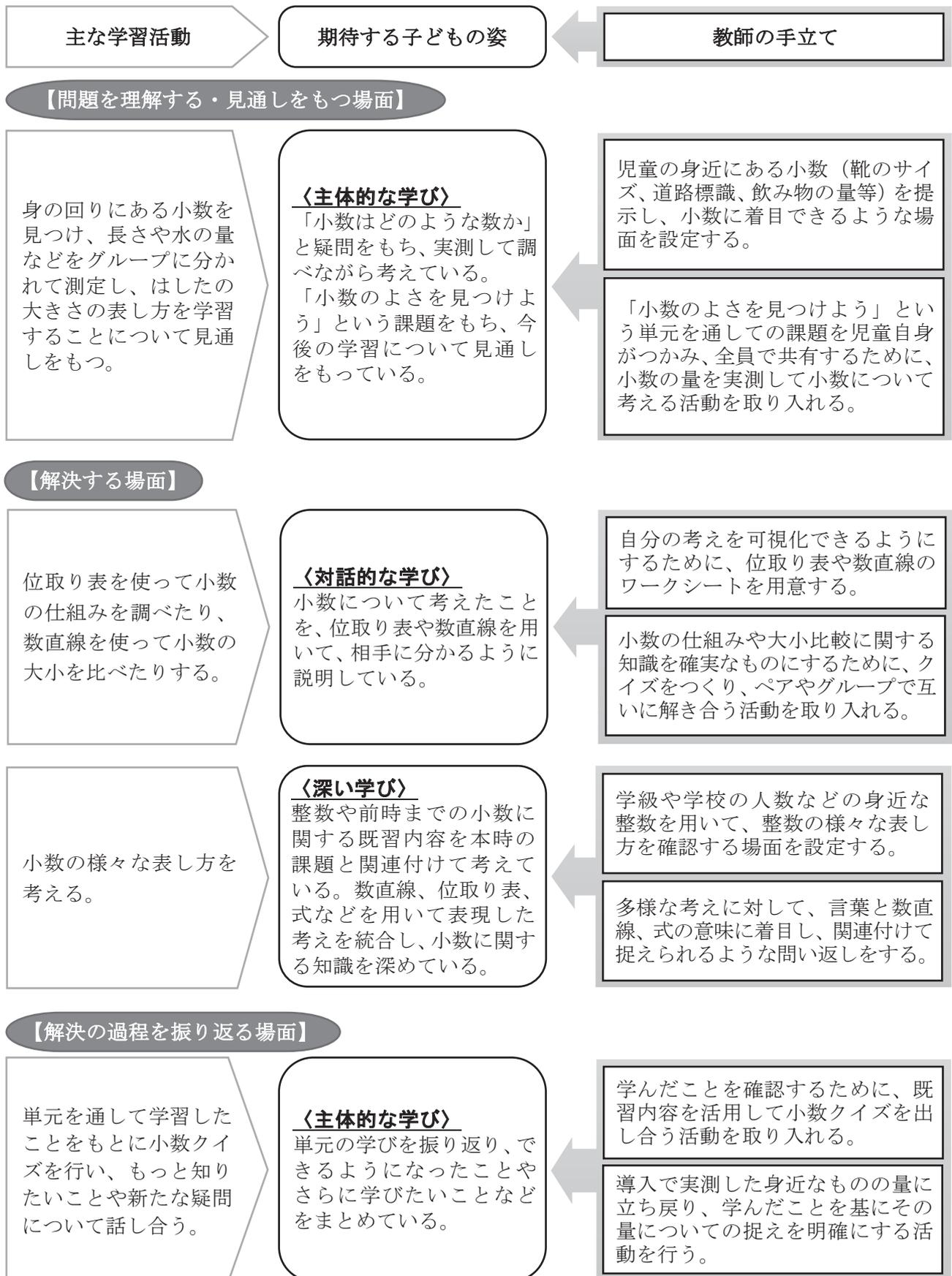
「対話的な学び」の視点で

数直線、液量図等を用いてペアやグループで互いに説明し合う活動を取り入れ、児童が自分の考えを明瞭かつ的確に表現し、相手に分かりやすく説明することができるようにする。また、相手を納得させるように説明することを意識し、よりよい表現に高めていけるようにするために、相手の説明を聞いて分からないことについては質問し、その質問に答えるために、表現に工夫を加えるよう助言する。

「深い学び」の視点で

単元の終盤では、小数を多様な見方で捉えて表現する活動を取り入れ、児童が単元を通して学んだ小数に関する知識を統合し理解を深めることができるようにする。その際、式と数直線、言葉と式など、異なる表現でも同じ意味を表していることに児童が気付けるよう、多様な見方を比較する場面において、児童の思考に揺さぶりをかける発問をするなど、学び合いをコーディネートする。

3 授業改善の構想



4 実践の様子

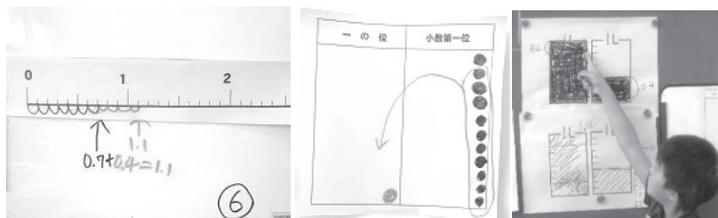
ここでは、前時までに身に付けた様々な知識を使って、一つの小数の多様な見方について考え、数直線や式などを用いて表したり説明したりするための指導の工夫について紹介する。

【解決する場面で】

手立て

多様な思考を表現するツールを用意

○単元を通して使用するいくつかのツール（数直線、位取り表、液量図など）を用意し、児童が自分の考えに合わせて自由に選んで思考できるようにした。



〔単元を通して使用したツールと児童の思考の様子〕

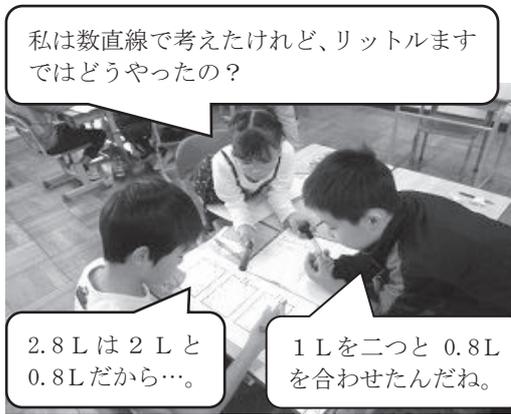
子どもの姿

複数のツールを使って思考（個人）

一つのツールを使った考え方だけでなく、他の方法でもできないか、児童一人一人が考えていた。

自分の考えを説明（グループ）

自分が選んだツールを使い、自分の考えを相手に分かりやすく説明していた。聞いている児童は、自分と違う考えに気付くとともに、分からないところを質問するなど納得するまでやり取りする様子が見られた。



私は数直線で考えたけれど、リットルますではどうやったの？

2.8 L は 2 L と 0.8 L だから…。

1 L を二つと 0.8 L を合わせたんだね。

〔自分の考えを説明している様子〕

手立て

児童の考えをつなぐ発問

○児童が発表する考えの中には、言葉や数直線、式などで表された多様な考えが出てくる。これらの共通点や関連性に気付くことができるように、練り合いを深めていくための発問や問い返しを行った。

子どもの姿



〔児童と教師のやりとりの様子〕

数直線と式をつなげるやり取り（以下のCは子ども、Tは教師）

C 1 : (黒板で数直線を指しながら) 数直線で考えると、2 と 0.8 を合わせた数です。

T : 同じ考えで、他の説明の仕方もありましたね。C 2 さん、どうですか？ (意図的指名)

C 2 : 2 より 0.8 大きい数です。

T : C 2 さんの説明は、他のどれと同じかな？ (数直線以外の考えで)

C 3 : 式で考えた班と一緒なんじゃないかな？

T : どうしてそう言えるのかな？

C 4 : $2 + 0.8$ は、2 より 0.8 大きいということだからです。

このようなやり取りを経て、さらに練り合う場面では、児童が新しい発見をしていた。

C 5 : この数直線は 3 より 0.2 小さいという意味だから、 $3 - 0.2$ だ。引き算でも表せるよ。

C 6 : (未習ではあるが) 0.1 を 28 個集めた数は、 0.1×28 だ。かけ算でも表せるね。

他にもこんな工夫を・・・

【問題を理解する・見通しをもつ場面で】

日常生活で目にする身近な小数を実感する場面の設定

単元の最初に、靴のサイズ、しょうゆの量、水筒に入る水の量などを実測することにより、小数に対する興味や関心を高め、「小数のよさを見つけよう」という単元を通しての課題を共有した。

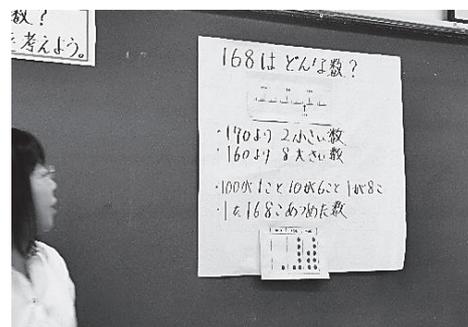


【具体物を実測している様子】

様々な数の表し方を促す場面の設定

小数を式や図など様々な方法で表す活動に入る前に、整数を様々な方法で表すことを考えるような場面を設定した。この活動により、その後の小数を様々な方法で表す活動が活発に行われた。

- T : 3年生の人数は25人。25って、どんな数？
C 7 : 1を25個集めた数。
C 8 : 20と5を合わせた数。
T : 私たちの小学校の全校生の人数は？
C 9 : 168人。
T : 168って、どんな数？
C 10 : 100が1個、10が6個、1が8個を合わせた数。
T : (数直線を黒板に貼る)
C 11 : 170より2小さい数。
C 12 : 160より8大きい数。



【身近な整数を提示し、様々な表し方を共有】

【解決の過程を振り返る場面で】

単元のまとめとして小数クイズを実施

ペアになり、自分が思い浮かべたある一つの小数を、これまでに学習した言葉や式、図などで表し、それを相手に示して数を当ててもらった。出題することで、これまでに学習したことを活用するとともに、小数について再確認することができた。単元の最後の振り返りでは、「整数だけでは表せないものが小数で表せることが分かった」「小数は整数のように扱える便利なものだ」「小数でかけ算やわり算もできるのではないか。もっと勉強してみたい」という記述が見られた。



【ペアで小数クイズに取り組む様子】

本実践を通して



整数や小数に関する学習で、既習内容や様々な考えをつなぎ、より確かな知識として定着を図るためには、児童から出された多くの考えを発表させることにとどまらず、言葉、数、式、図、表、グラフなどの相互の関連に気付かせることが大切です。本事例では、教師が児童の言葉を拾ったりつないだりしてコーディネートすることで、児童は多様な見方に気付き、小数の仕組みや意味についての理解を深めることができました。

授業実践7 小学校 第5学年 算数科

「自分の考えをもち、友達と能動的に対話することにより、自分の考えを深めることを目指した事例」

単元名 「三角形と四角形の角」

単元のねらい

- ・ 図形の性質に関心をもち三角形や四角形の角の大きさについて筋道を立てて考えようとする。
(算数への関心・意欲・態度)
- ・ 三角形の内角の和が 180° であることを説明することができる。また、それを基にして、そのほかの多角形の内角の和の求め方を考えることができる。
(数学的な考え方)
- ・ 三角形や四角形の内角の和を基にして、未知の角の大きさを求めることができる。
(数量や図形についての技能)
- ・ 三角形の内角の和が 180° であることと、多角形の内角の和は三角形に分割することによって求められることを理解する。
(数量や図形についての知識・理解)

1 これまでの課題

これまで「三角形と四角形の角」の単元では、前時と本時とのつながりを意識して指導するよう努めてきたが、児童から「三角形の内角の和の学習を基にして四角形や五角形等の多角形の内角の和も調べてみたい」という課題意識を引き出す働きかけが不十分であった。また、児童同士が自分の考えを伝え合う活動は取り入れていたが、話合いの視点を明確に示してこなかったため、児童が目的意識をもって考えを広げ深めることができなかつた。複数の考えを共有する場面では、それらの考えを発表することだけに終始してしまい、児童が自分とは異なる考えについて理解できたかどうかについて確認する手立てが不十分であった。

2 授業改善の視点《単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

三角形や多角形の角の大きさの和について複数の方法で考えられるよう、既習内容を教室に掲示したりノートを見返すよう促したりする。振り返りの場面では、児童が学習したことを自覚できるよう、新たに気付いたことや今後挑戦してみたいことなど振り返りに記述する視点を示す。また、単元を通して児童が意欲的に取り組めるよう、児童の様々な反応を授業に生かすための授業構想ノートを作成し、児童の実態に沿った単元を構想する。

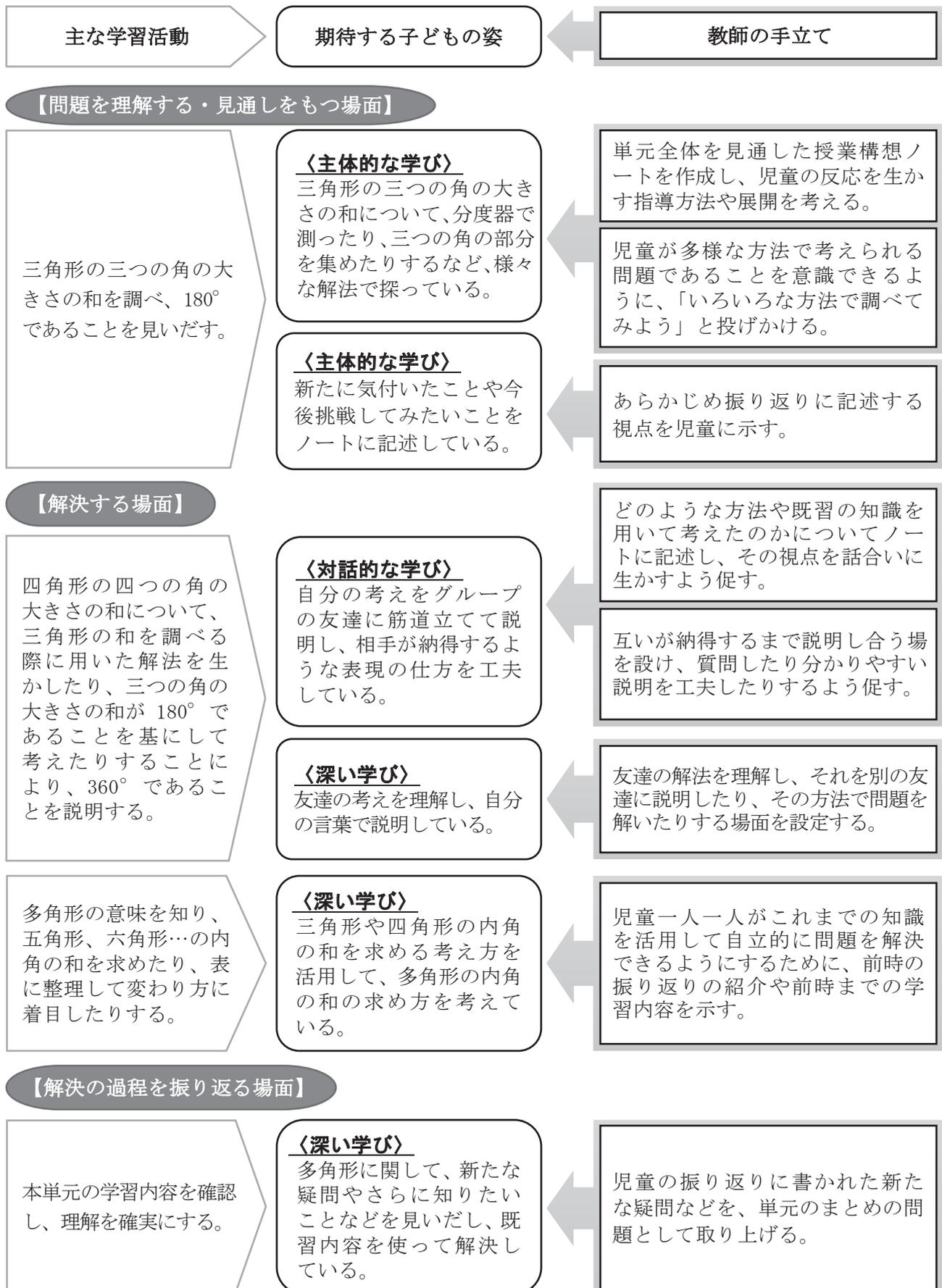
「対話的な学び」の視点で

三角形や多角形の角の大きさの和の求め方について、個人で考える際には、児童が自分の考えを整理できるよう、考えた方法と使った既習の知識を分けてノートに記述することを全体で共有する場を設ける。また、グループでの話合いでは、児童同士が多様な考え方を共有できるよう、方法や根拠の共通点や相違点に着目しながら説明し合う場を設ける。さらに、友達の考え方への理解を深めるために、聞き手には疑問に思ったことを質問するよう促し、説明者には根拠を明確にして伝えるよう助言する。

「深い学び」の視点で

児童が自分とは異なる考え方を理解することができるよう、友達の考えを自分の言葉で説明したり、それを使って問題を解いたりする場を設ける。また、児童が書いた振り返りの中から新たな課題を取り上げ、単元のまとめとして解決を図る場面を設定する。

3 授業改善の構想



4 実践の様子

ここでは、三角形の内角の和の性質を基に四角形や多角形の内角の和の求め方について自分の考えをもち、相手に分かりやすく説明することを目指すとともに、友達との対話によって得られた様々な方法から多角形の内角の和についての理解を深める指導の工夫について紹介する。

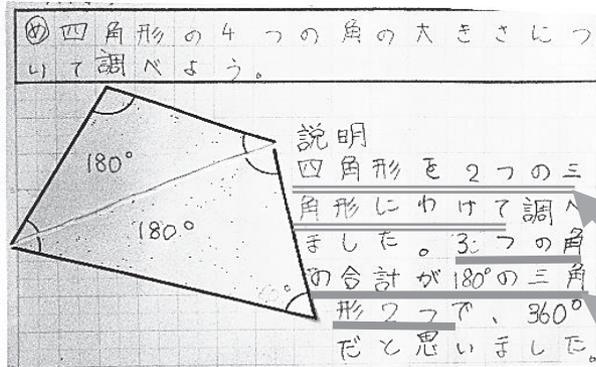
【解決する場面で】

手立て

児童に自分の考えをもたせるためのノート記述の視点の共有

○児童が自分の考えをもち、それを整理してノートに表現することができるよう、「どのような方法で求めたのか」「既習のどの知識を使ったのか」という二つの視点を示した。

子どもの姿



【方法と根拠が書かれたノート】

自分の考えをノートに記述（個人）

日頃から「どんな方法を使ったのか」「今まで習ったどんなことを使ったのか」「なぜそのように考えるのか」などと児童に問いかけている。本授業でも方法や根拠を視点として明確に示したことで、児童がしっかりと自分の考えを書くことができた。

方法に関する記述

既習のどの知識を活用したかに関する記述

手立て

自分の考えを試行錯誤しながら説明し合う場の設定

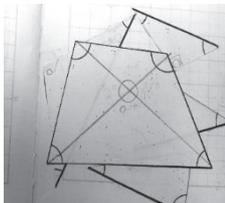
○個人の作業においては、児童それぞれの考えを尊重し見守るようにした。その後、グループ活動では、友達から「なぜ？」と質問される場を設けるなど、試行錯誤しながらも相手に説明することを通して、理解を深めていくことができるようにした。また、教師も方法や根拠を確認するための問いかけを行った。

子どもの姿



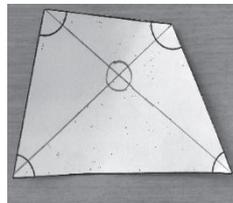
（個人）

しばらくじっと考えた後、対角線で切った。



（個人）

切ってばらばらになった三角形は分かりにくかったため、図に対角線を引いた。



（個人）

説明するための図を完成させた。

中に円ができたので、三角形四つ分の角の合計から 360° を引けば求められるよ。



（グループ）

相手が納得するまで丁寧に説明しようとした。「 360° を引く」こと理由を説明することにより、自分の考えを整理することができた。

円って何？ 360° はどこからきたの？

この活動を受けて、説明を受けた児童がそれを別の友達に説明する場を設けた。相手が納得いくまで何度も説明したため、自分の言葉で相手に伝えることができた。また、全体での発表では、友達の考えを別の児童が説明することにより、自分とは異なる考え方の確かな理解につながった。

〇〇さんの考えでは、ここにいない角ができて…。



いない角ってどういうこと？

〇〇さんが言っていたように対角線を引いて…。



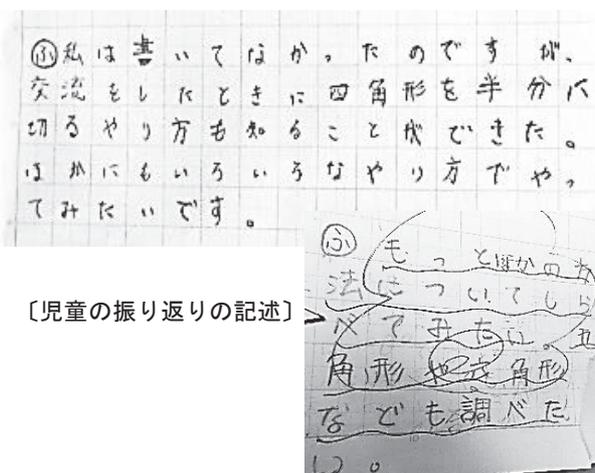
【友達の考えを説明する様子】

他にもこんな工夫を・・・

【解決の過程を振り返る場面で】

本時の目標に沿った振り返りと記述する時間の確保

対話を通して、自分が分かったことや気付いたこと、初めて知ったこと、できるようになったことなどをノートにまとめる振り返りの時間を設定した。このように、自分の学習を振り返ることで、今後取り組みたいことや新たな課題に気付いたり、意欲を高めたりすることができた。今後の取組や新たな課題について書かれた記述を次時の導入や単元のまとめで取り上げることで、他の児童の新たな課題意識につなげることができた。



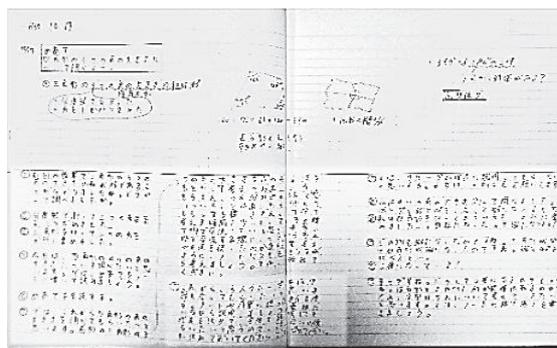
【児童の振り返りの記述】

【問題を解決する・見通しをもつ場面で】

授業構想ノートの作成

予想される児童の反応と発問や問い返しに重きを置いて、単元を見通した授業構想ノートを作成した。児童の反応をできるだけ多く予想して書いておくとともに、それらを引き出すための発問を考えたことで、発問を精選したり、一人一人に適切な支援をしたりすることができた。

また、授業で出された児童の考えや振り返りを記録し、その後の授業につなげることで、単元を通して児童の学ぶ意欲を高めることができた。



【教師自身の授業構想ノート】

本実践を通して



児童は、「今までの方法ではなかなかできない」「ここからどうやったらできるだろう」「もう少しでできそうだけれど」「自分の考えは合っているかな」「自分とは違う方法だけれど、どうやったのだろう」などの思いをもつことで、試行錯誤したり対話をしたりする必然性を感じながら活動することができます。本事例では、グループ活動で自分の考えを発表するだけでなく、友達の発表で分からないところを聞き返し、より分かりやすい表現にするにはどうすればよいか全員で考えていくことを通して、三角形の内角の和を基にして多角形の内角の和を求められることに気付き、内角の和についての理解を深めることができました。

授業実践 8 中学校 第2学年 数学科

「単元を通して身の回りの事象を取り上げるとともに、協働して解決する場を設け、一次関数の特徴や意味の理解をより確かなものにすることを目指した事例」

単元名 「一次関数」

単元のねらい

- ・様々な事象を一次関数として捉えたり、表、式、グラフなどで表したりするなど、数学的に考え表現することに関心を持ち、意欲的に数学を問題の解決に活用して考えたり判断したりしようとする。(数学への関心・意欲・態度)
- ・一次関数についての基礎的・基本的な知識や技能を活用して、論理的に考察し表現するなど、数学的な見方や考え方を身に付けることができる。(数学的な見方や考え方)
- ・一次関数の関係を、表、式、グラフを用いて的確に表現したり、数学的に処理したり、二元一次方程式を関数関係を表す式とみてグラフに表したりするなどの技能を身に付けることができる。(数学的な技能)
- ・事象の中には一次関数として捉えられるものがあることや一次関数の表、式、グラフの関連などを理解し、知識を身に付けることができる。(数量や図形などについての知識・理解)

1 これまでの課題

「一次関数」の単元では、表、式、グラフが生徒にとって抽象的であるため、具体的な事象との関連性が得られないまま授業が進んでしまうように感じている。特に、知識・技能の習得を主とする授業では、教師が一方向的に説明してしまい、理解できる生徒と教師だけで授業を進めてしまう傾向にあった。また、計算によって求められた値や、かいたグラフが正しいかどうかを検証する場面が少ないことも課題である。

2 授業改善の視点《単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

生徒が一次関数を身近なものとして捉え、関心をもって課題解決に向かうことができるよう、一次関数とみなすことができるような身の回りの事象を、単元を通した問題として取り上げる。今回の実践では、身の回りの事象として電話料金と通話時間の関係を取り上げ、一次関数とみなすことで問題場面と表、式、グラフを相互に関連付けて考えるような場を設定する。

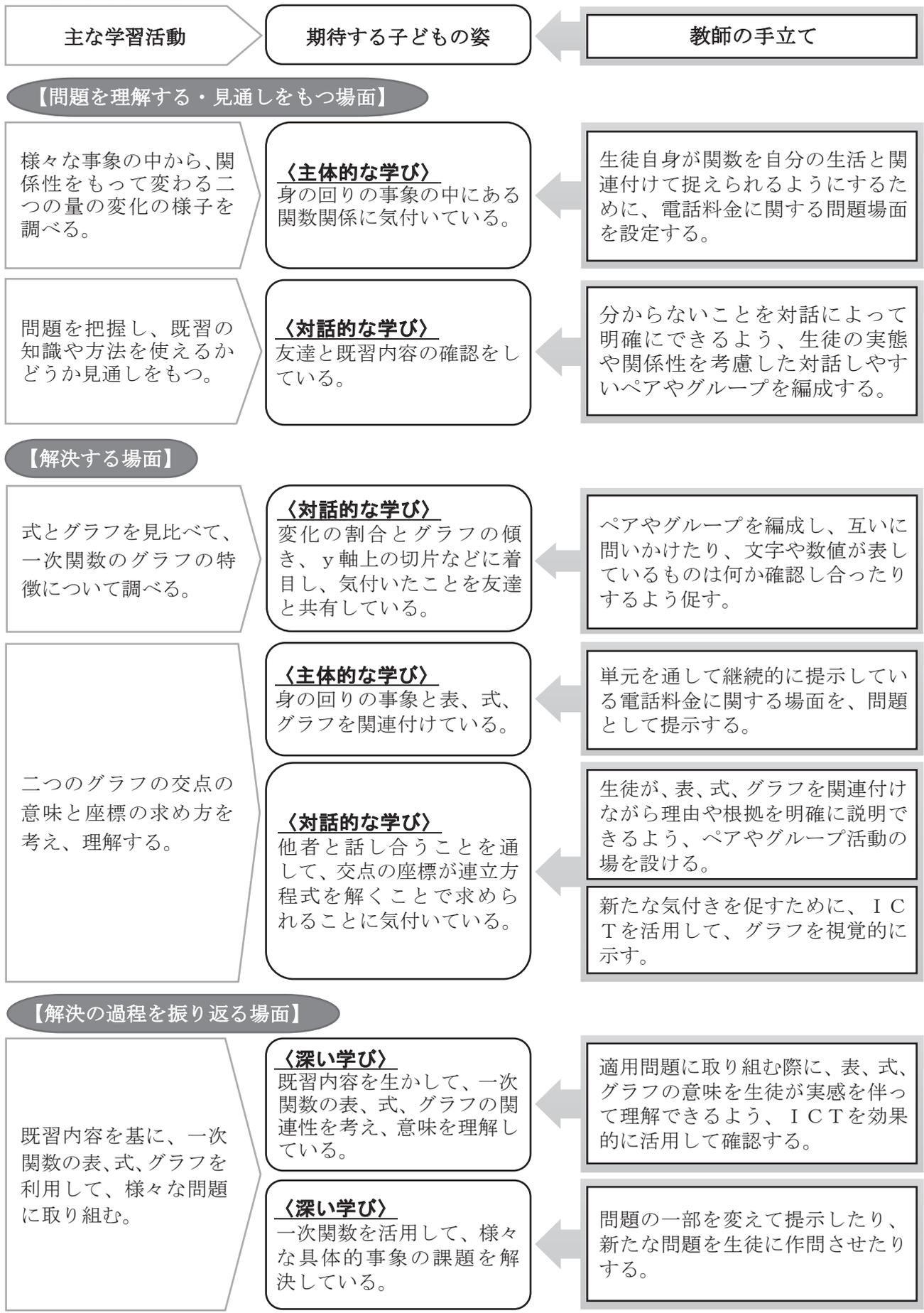
「対話的な学び」の視点で

課題に対して生徒が活発に話し合うことができるよう、生徒の実態や関係性を考慮した小グループを編成する。また、ペアで疑問を問いかけるよう促したり、自分の考えと相手の考えの共通点や相違点に着目して話し合うよう助言したりする。さらに、ICTを活用して一次関数のグラフを視覚的に示すことで生徒の疑問や気づきを促し、協働して解決するような場を設定する。

「深い学び」の視点で

表、式、グラフの関連性の理解を図るため、活用問題を解決する場面だけでなく、技能や知識・理解の習得を主とする場面においても、常に生徒に「表、式、グラフではどうなるのか」「本当にそれは正しいのか」「文字や数値は何を表しているのか」を問うようにする。また、習得した知識や技能を活用して課題解決に向かうことができるよう、生徒が問題を作って互いに解き合ったり、身の回りの事象から問題を見つけ出し解決したりするような場を設定する。

3 授業改善の構想



4 実践の様子

ここでは、導入を含めた7時間の授業で「通話時間と電話料金の関係を一次関数とみなして考える活動」を取り入れることで、単なる知識の詰め込みではなく、関数を自分の生活と結び付けて考えることで疑問や気付きを促し、それらを友達と協働して解決することを通して、知識をより確実なものにするための指導の工夫について紹介する。

【解決する場面で】

手立て

「二つのグラフの交点の座標は、グラフの式を連立方程式にして解くことで求められる」と教えるのではなく、このことを生徒が実感できるようにするために、次のような工夫を行った。

単元を通して、身近な事象を問題場面として提示し、生徒の関心を高める工夫

○生徒が、「身近な事象を一次関数とみなして解けば、解を求められるのではないか」という見通しをもって取り組めるよう、以下の課題を提示した。

【課題】 A「うちは1分あたりの通話料が6円で、基本料金が350円だよ。」
B「うちは1分あたりの通話料が8円で、基本料金が200円だよ。」
A「…。ということは、同じ通話時間で同じ電話料金になることがあるね。」
B「…え？」

生徒が多様な考えを基に思考する場の設定

○表、式、グラフの考え方を共有できるよう、ペアやグループを編成し、協働して考える場を設けた。また、文字や数値が何を表しているかを明確に理解するために、対話で「なぜ?」「その意味は?」と繰り返し問い返すよう促した。

子どもの姿



【ペアやグループで課題解決に向かう様子】

試行錯誤しながら対話を通して解決に向かう姿

個人で考えた後、グループで協働して課題を解決する場面では、「AとBがあるから式を立ててみよう」と提案した生徒に「計算するの? どうやって求めるの?」と質問する様子や、「当てずっぽうに数が合いそうところで考えたけれどだめだった。もっといい方法教えて」と質問する生徒も見られた。また、グループの枠を越えて話し合う場を設けたところ、立式して解を導き出した生徒が、表をかいて悩んでいる生徒に対して「自分は式を立てて計算したけど、表でもできるね。この場合…」と声をかけ、一緒に考えようとする姿が見られた。

このように、友達に質問したり、質問されたことに対して説明したりする場面を多く設定したことで、生徒は多様な考え方に触れ、それらの考え方を関連付けながら課題解決に向かうことができた。

表、式、グラフを関連付けながら個人で思考している姿

対話的な学びは、自分の中で行うこともある。本実践では、ある生徒が、自己内対話により思考を深めている様子が見られた。このような場面では、教師は見守り、思考の時間を確保した。

<ある生徒の学びの姿>

(悩み) 電話料金の問題では、当てずっぽうに値を当てはめてみたが、解決することができず、悩んでいた。

(新たな知識) グラフの交点の座標は連立方程式の解であることを友達の説明によって知り、式やグラフを使うと正確に求められることを理解した。

(知識の活用と誤答の気付き) 適用問題では、グラフの交点の座標と連立方程式で出した答えを見比べて、「グラフの座標は1までいっていないのに、連立方程式の答えは1より大きくなっている。」と自分の間違いに気付いた。

他にもこんな工夫を・・・

【問題を理解する・見通しをもつ場面で】

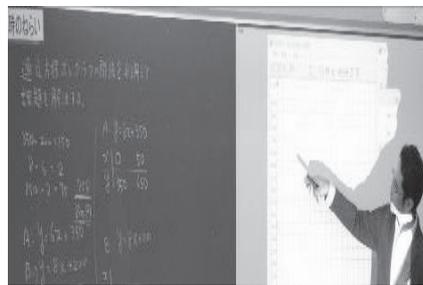


【学習課題について確認する様子】

課題の共有化・明確化を図るためのペアやグループでの対話

生徒の実態や関係性を考慮したペアやグループを編成し、分からないことを常に質問するよう促したことで、対話しやすい雰囲気生まれた。課題を把握することが難しい生徒は、「今聞かれていることは何?」「前の時間にやったことは何?」と友達に聞くことができた。また、説明する生徒も自分の言葉で伝えることにより、本時の課題がより明確になったり、既習内容を再確認できたりした。分からないことを確認したり、それに対して説明したりする姿は、単元を通して見られた。

【解決する場面で】



【計算で求めた解と見比べて提示したグラフを生徒に問いかけている様子】

式とグラフの関連性に気付かせるための問いかけ

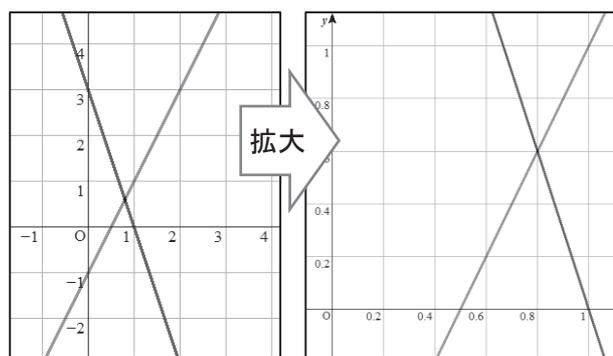
ペアやグループで共有できた表、式、グラフの考え方や、文字や値が何を表しているのかについて全体で確認した。その際、ICTを活用してグラフを提示しながら、連立方程式から導き出した解と、グラフの交点の座標との関連性に気付かせるために「このグラフとみんなから出された計算を見比べて、何か気付くことはないかな?」と問いかけた。ペアで話し合う中で、「グラフは1点で交わっているよね」「その座標ってさ...」「あ、計算で出した答えじゃない?」というつぶやきが聞かれた。これらの活動により、「グラフの交点の座標は連立方程式を解けば求められる」ということを生徒自身が見いだすことができた。

【解決の過程を振り返る場面で】

出した答えを視覚的に確認するための効果的な提示

連立方程式を解くことで交点の座標を求めることはできるが、単に数値として出ただけという生徒も多い。

交点の座標が小数になる問題では、ICTを活用してグラフを拡大表示して検証したところ、「本当だ、計算で求めた数値は確かに交点の座標になるんだ」という声があがり、生徒の実感を伴った理解につながった。



【ICTを活用して表示したグラフ】

本実践を通して



本事例では、一次関数とみなすことができる身の回りの事象と、表、式、グラフを関連付けながら、文字や数値、グラフなどが何を表しているのかを友達と協働して考えることで一次関数への理解を深めることができました。このように、数学的な見方・考え方を働かせながら、学習内容を身の回りの事象と結び付けて捉え、思考する活動を積み重ねることは、事象を論理的に考察し、生活の中で数学を積極的に活用していこうとする態度を養うことにつながります。

授業実践9 小学校 第5学年 理科

「他者の意見や既習内容を関係付けて体系化し、自分の考えを作り上げる事例」

単元名 「雲と天気の変化」

単元のねらい

- ・雲の様子や天気の変化について興味・関心をもち、雲の様子を観察したり、気象情報を収集したりしようとしている。
(自然事象への関心・意欲・態度)
- ・天気の変化と気象情報をまとめた結果とを関係付けて考察し、自分の考えを表現することができる。
(科学的な思考・表現)
- ・雲の量や動きなどを観察して記録したり、気象情報を収集したりすることができる。
(観察・実験の技能)
- ・テレビや新聞、インターネットを活用して数日間の天気の様子を調べることを通して、雲の量や動きと天気の変化の関係性や天気の規則性を理解することができる。
(自然事象についての知識・理解)

1 これまでの課題

これまでも対話的な活動を取り入れた授業を進んで実践してきたが、既習の知識を関連付けて説明したり、様々な情報の中から必要なものを選んで考えを形成して発表したりするなど、深い学びにつながる対話にすることが課題となっている。

2 授業改善の視点《単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

課題把握の場面で、様々な天気や季節の空の様子を提示し、共通点や差異点に気付かせることで、雲と天気に興味をもてるようにする。また、単元の最後に天気予報をするというゴールを伝え、そのために必要な情報は何かを考えさせることで、見通しをもって学習に取り組めるようにする。振り返りの場面では、気付いたことや分かったことに加えて、日々の生活と関連付けたり、改善点を考えたり、新たな課題を見いだしたりすることができるようにする。

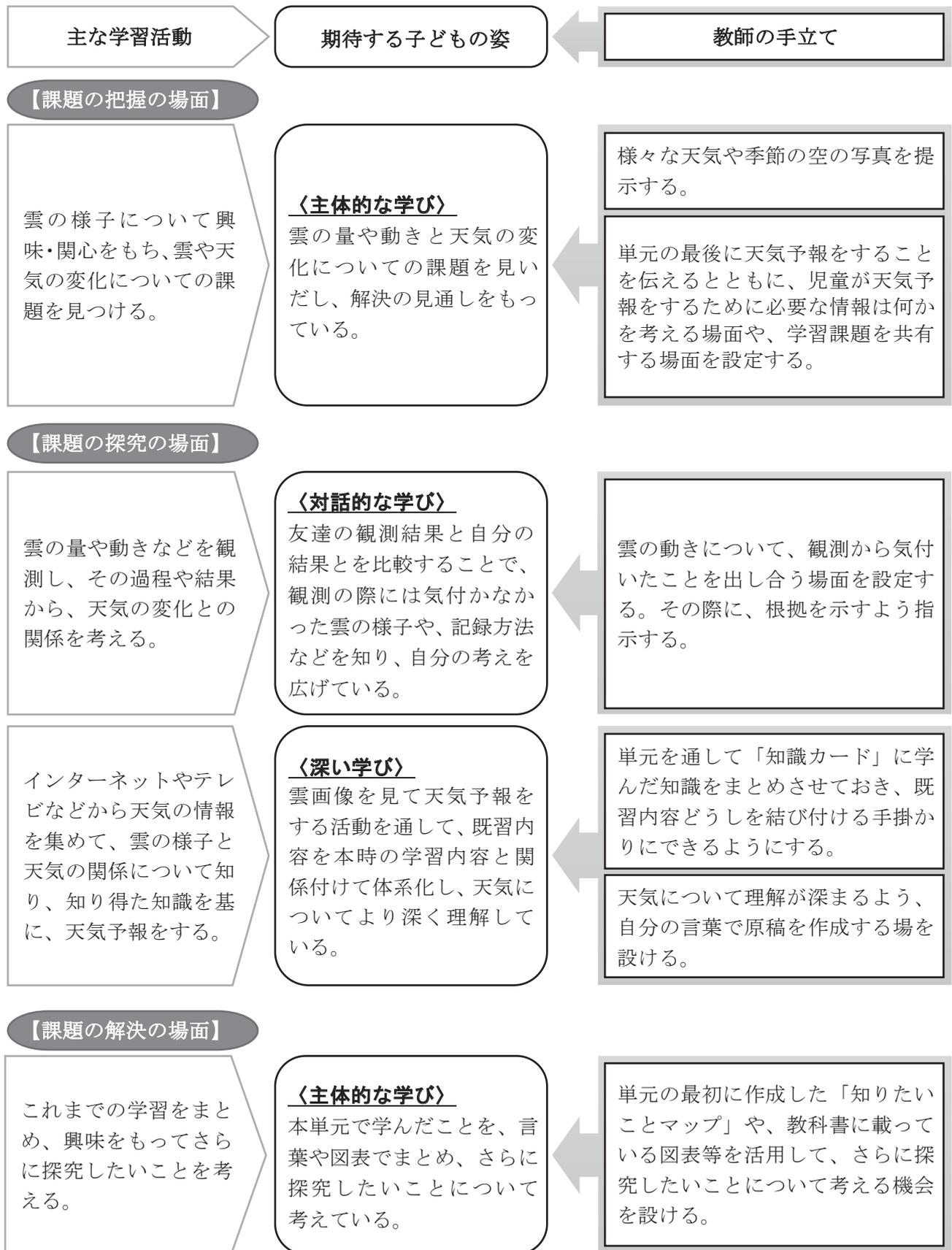
「対話的な学び」の視点で

雲の量や動きと天気の変化との関連について、予想や仮説を立てる中で自分の考えをまとめ、互いに見いだした共通点や差異点について話し合うことで、自分の考えをより明確にしたり修正したりできるようにする。また、考えを伝え合う際には、単純な意見交換ではなく、根拠を示すようにして、互いに納得できる答えが形成できるようにする。

「深い学び」の視点で

雲の量や動きと天気の変化との関連について、既習内容を基に天気の変化を予想し、得られた結果から考察し、自分の考えを表現する経験を通して、気象衛星の雲画像を見て天気予報ができるようにする。また、予報原稿を作成する中で、必要な情報を精査し、自分の考えを作り上げられるようにする。

3 授業改善の構想



4 実践の様子

ここでは、「気象衛星の雲画像の動きを見て、天気の変化を予想する活動を通して、自分の予想を既習の知識や友達の考えと比較したり、関係付けたりして、天気の変化に関する自分の考えを形成する」学びを目指した指導の工夫について紹介する。

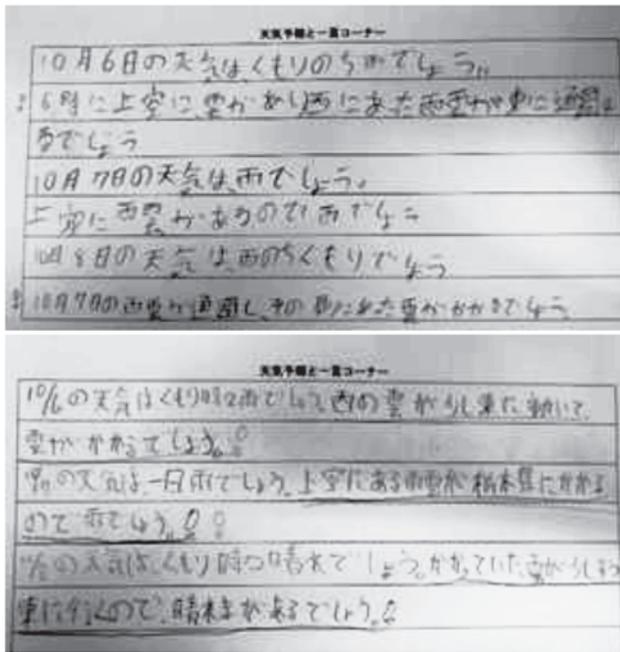
【課題の探究の場面で】

手立て

- 自分の考えを整理して、友達に分かりやす伝えたり、天気の移り変わりを雲の動きと関係付けて捉えたりすることができるようにするために、「天気予報の原稿」を書く場面を設定した。その際、自分の考えをまとめたり伝えたりするための手助けとして、「知識カード」を活用したり、タブレット端末を用いて雲の動きを捉えたりするよう促した。



【タブレットを使った話し合い】



【個人の天気予報の原稿】

子どもの姿

単元を通して、学習した内容を「知識カード」にまとめてきた。これを活用することで、予想を立てたり、話し合いの中で根拠として友達に示したりして、既習内容と本時の学習とを関係付けることができていた。

定位置の天気の時間的な変化を、空間的な広がりをもつ雲の動きによって説明するためには、幾つかの知識を関係付けて体系化する必要があるが、「知識カード」の活用は考えをまとめていく上で有効であった。また、「知識カード」は、考えを伝えるのが苦手な児童の手助けとしても効果的であった。「…だから…だと思ふ」などのように、根拠を明確にした説明ができる児童が多くなった。

「天気予報」の発表をする際には、気象衛星からの雲画像を取り込んだタブレット端末を活用した。雲の動きを示したり、画面に書き込むことができたので、発表する上で、大変効果的であった。



【知識カードを手に、話し合う姿】



【画像に書き込みながら説明している姿】

授業実践 10 中学校 第3学年 理科

「課題を解決するための概念を獲得し、それを活用して協働的に解決する事例」

単元名 「仕事とエネルギー」

単元のねらい

- ・左右が非対称の振り子について興味をもち、なぜ左右が同じ高さになるのか調べようとしている。
(自然事象への関心・意欲・態度)
- ・身の回りの現象と結び付けながら、仕事、仕事の原理、仕事率、位置エネルギー、運動エネルギー、力学的エネルギー保存の法則などの概念を活用できる。
(科学的な思考・表現)
- ・実験結果から、位置エネルギーと運動エネルギーの移り変わりの様子や、力学的エネルギーの保存を見いだすことができる。
(観察・実験の技能)
- ・仕事、仕事の原理、仕事率、位置エネルギー、運動エネルギー、力学的エネルギー保存の法則について理解することができる。
(自然事象についての知識・理解)

1 これまでの課題

生徒にとって抽象的で分かりにくい単元であり、これまで形式的な理解に留まりがちであった。特に実験結果を解釈して位置エネルギーや運動エネルギーの性質を見いだすのが難しく、どうしても説明中心の授業になってしまうのが課題である。

2 授業改善の視点《単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

単元の導入で、これから探究する課題を生徒自身が見いだすことができるよう工夫することで、見通しをもって学習を進められるようにする。また、本単元で扱う仕事やエネルギーなどの概念は抽象的で分かりにくいいため、身の回りの現象と関連付けながら科学的に捉えられるよう工夫し、数量的に扱うことよさが実感できるようにする。

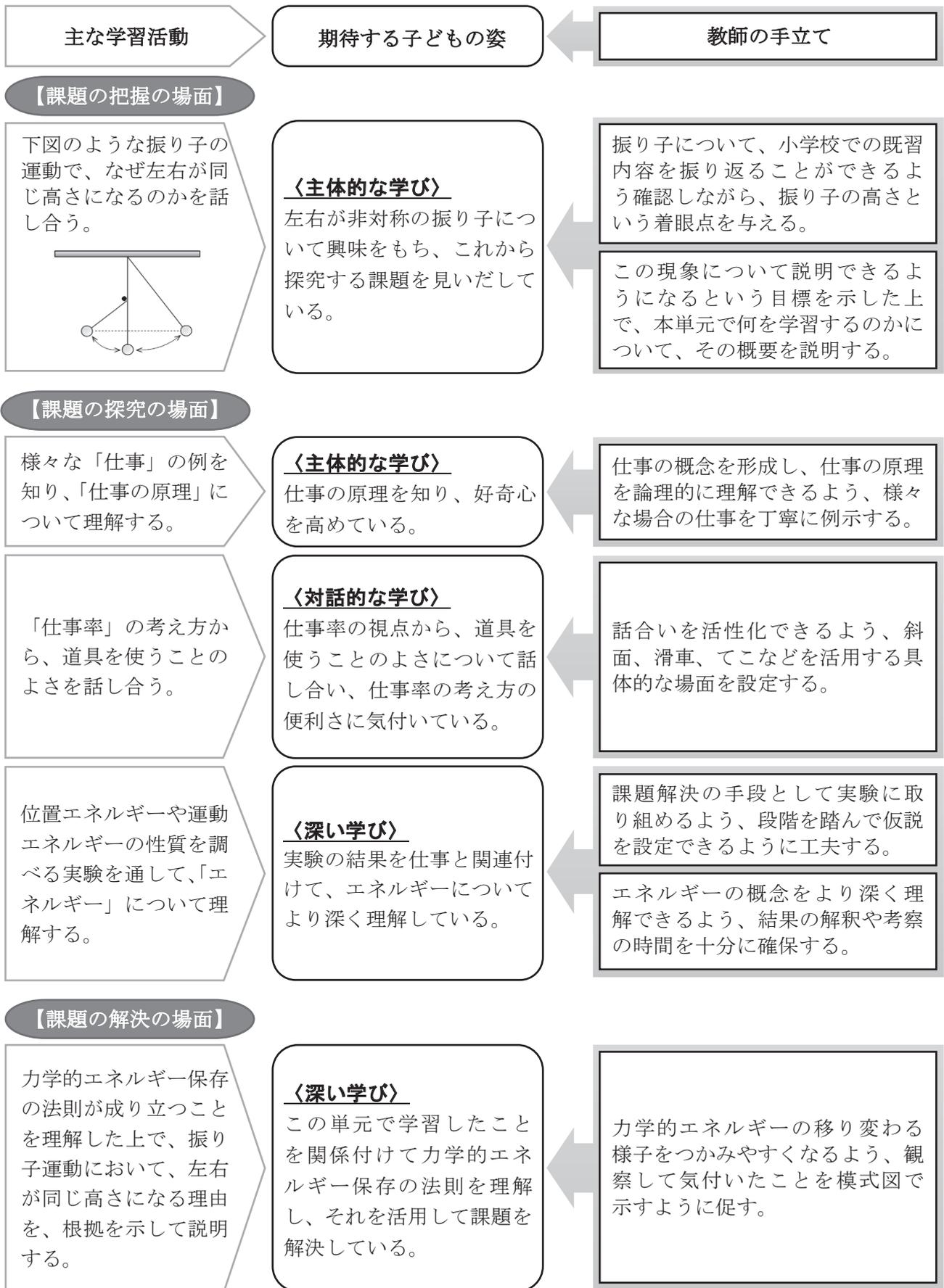
「対話的な学び」の視点で

実験結果の解釈や考察の場面で、自分の考えをもたせてから、じっくりと話し合うようにする。このとき、実験データをグラフ、数式等を活用しながら分析・解釈することを通して、現象について深く理解できるようにする。

「深い学び」の視点で

実験データを基に、グラフ化したり、数式化したりしながら、位置エネルギーや運動エネルギーを決める要素を見いだせるようにする。また、この単元で学んだエネルギーの考え方を活用しながら課題を探究する場面を設定し、深い理解を促すよう工夫する。

3 授業改善の構想



4 実践の様子

ここでは、左右非対称な振り子でも、両端でおもりが達する最高点の高さが等しくなる理由を、力学的エネルギー保存の法則を根拠に生徒が説明するための指導の工夫について紹介する。

【課題の探究の場面で】

手立て

○自由落下、通常の振り子、左右非対称の振り子と三つのステップを設定し、段階的にねらいに迫ることができるよう工夫した。

STEP1

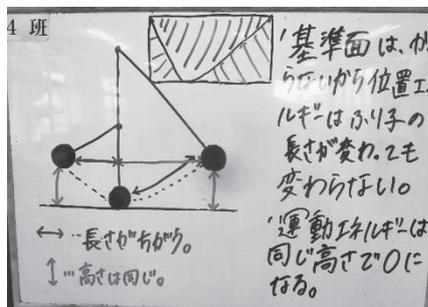
自由落下を例にして、位置エネルギーと運動エネルギーの移り変わりに気づき、力学的エネルギー保存の法則の理解につなげる。

STEP2

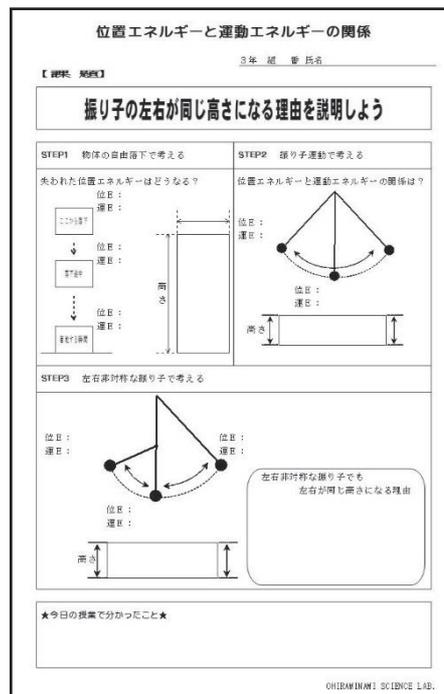
力学的エネルギー保存の法則を活用して、通常の振り子でおもりの高さが左右同じになる理由を考えて、論理的に考察する手順を学ぶ。

STEP3

STEP2 で学習した手順で左右非対称の振り子について考える。班で話し合った後、考えをホワイトボードにまとめ、学級全体で共有する。



〔考えをまとめたホワイトボード〕

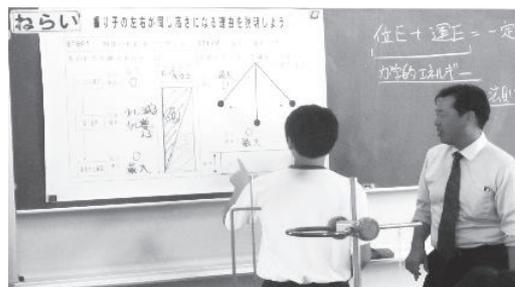


〔使用したワークシート〕

子どもの姿

STEP1 で学んだ「力学的エネルギー保存の法則」が、通常の振り子で成立しているかを分析し、エネルギーの移り変わりの様子を図で示すことができた。図示する際に、位置エネルギーと運動エネルギーを区切る境界線が直線状になるのか、円弧のようになるのかで意見が分かれて議論になった。

STEP2 での考察の手順を活用して、左右非対称の振り子について自分の考えをもち、熱心に話し合うことができていた。ホワイトボードにまとめる際、細部にこだわって図示しようとしていて、深く考察している様子が見えた。議論が深まった分、発表者の説明に熱心に耳を傾けていた。ある発表者の「振り子はエネルギーの変換装置」という言葉が印象的だった。



〔区分を示している様子〕



〔発表の様子〕

他にもこんな工夫を・・・

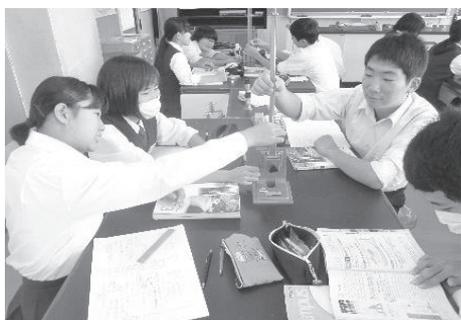
【課題の把握の場面で】

興味・関心を引き出す意外性のある題材

単元の導入で、小学校で学習した振り子の性質を想起させてから、振り子の左右でおもりの高さがどうなるかを予想させた。ほとんどの生徒が同じになると予想した。

その上で、次に「左右非対称の振り子」ではどうなるかについて予想させた。過半数の生徒が、ひもが短い方が高くなると予想した。実際にやってみせると、大方の予想と違って左右が同じ高さになり、驚きの声が出た。そこから、「なぜそうなるのか説明できるようになろう」と単元全体を見通した目標を設定することができた。

【課題の探究の場面で】



〔位置エネルギーの性質を調べる様子〕

課題解決の見通しをもたせる工夫

エネルギーについて正しく理解すると、課題を解決できるという見通しを示したことで、実験にも意欲的に取り組むことができていた。また、実験から分かったことを仕事と関連付けて考えるような場面を複数設定し、エネルギーについてより深く理解させることができた。

話し合いを活性化させる工夫

ワークシートを使用する場面で、教師が正答を発表するまで何も書かない状態を避けるために、ワークシートは両面に同じものを印刷し、片面は話し合いのためのメモ用に、もう片面は学習のまとめ用に使えるようにした。また、実験装置や振り子を使用しながら話し合えるようにした。これらの工夫をしたことで、話し合いがより活性化した。



〔非対称の振り子について考察する様子〕

【課題の解決の場面で】

課題解決後の振り返り

単元を通した課題が解決し、「おおーっ!!」「なるほど」等の反応が見られたタイミングで授業の振り返りをさせた。獲得した概念を外化させることで、より深い理解を促すことができた。

★今日の授業で分かったこと★

同じ高さになるのは、スタート地点で位Eが最大、運動Eが0になりちょうど真下へきたときスタートの値と釣りかわって、位Eが0、運動Eが最大になる。そして、ゴール地点へきたときにスタートと等しい値になる。等しい値になるので、振り子の高さも同じになる。全力的なエネルギーの保存が成り立っている。

〔分かったことを文章で表現する〕

本実践を通して



本事例では、力学的エネルギーという抽象的な概念を扱っています。生徒たちは、非対称振り子という意外性のある題材について、話し合いや発表などの活動を通して、互いの考えを参考にしながら自分の考えを広げ、深める過程を経て、運動エネルギーと位置エネルギーの移り変わりについて深く理解することができました。

授業実践 11 中学校 第3学年 外国語科

「調べたことや対話で得たことを基に、自分の思いや考えを結び付けてプレゼンテーション（以下「プレゼン」と表記）を行う事例」

単元名 「Lesson 5 Places to Go, Things to Do」

単元のねらい

- ・世界の様々な国や地域について意欲的に問答している。
(コミュニケーションへの興味・関心・意欲・態度)
- ・行きたい国やお勧めする国についてプレゼンをすることができる。(外国語表現の能力)
- ・関係代名詞が含まれる説明文を読み、概要を理解することができる。(外国語理解の能力)
- ・関係代名詞（主格・目的格）の用法を理解することができる。(言語や文化に対する知識・理解)

1 これまでの課題

これまでも、英語の説明を聞いて概要や要点を理解したり、英語の質問に対して英語で答えたり、生徒同士で即興で話したりする活動を重視して取り組んできた。そのため、自分個人の思いや気持ちなどを話すことはできる生徒が多い。しかし、対話を通して得た情報を基に自分の発表内容を再構築したり、聞き手を意識して作成したりするような深い学びにつなげる指導には課題がある。

2 授業改善の視点《単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

「お勧めの国や場所についてプレゼンをする」というテーマを設定し、生徒が単元のゴールであるプレゼンを想起できるように、教師がモデルとしてプレゼンを実演する。また、全体のプレゼン発表前に「一番魅力的なプレゼンはどのチームか」と「その理由」を考えながら聞くように指示する。

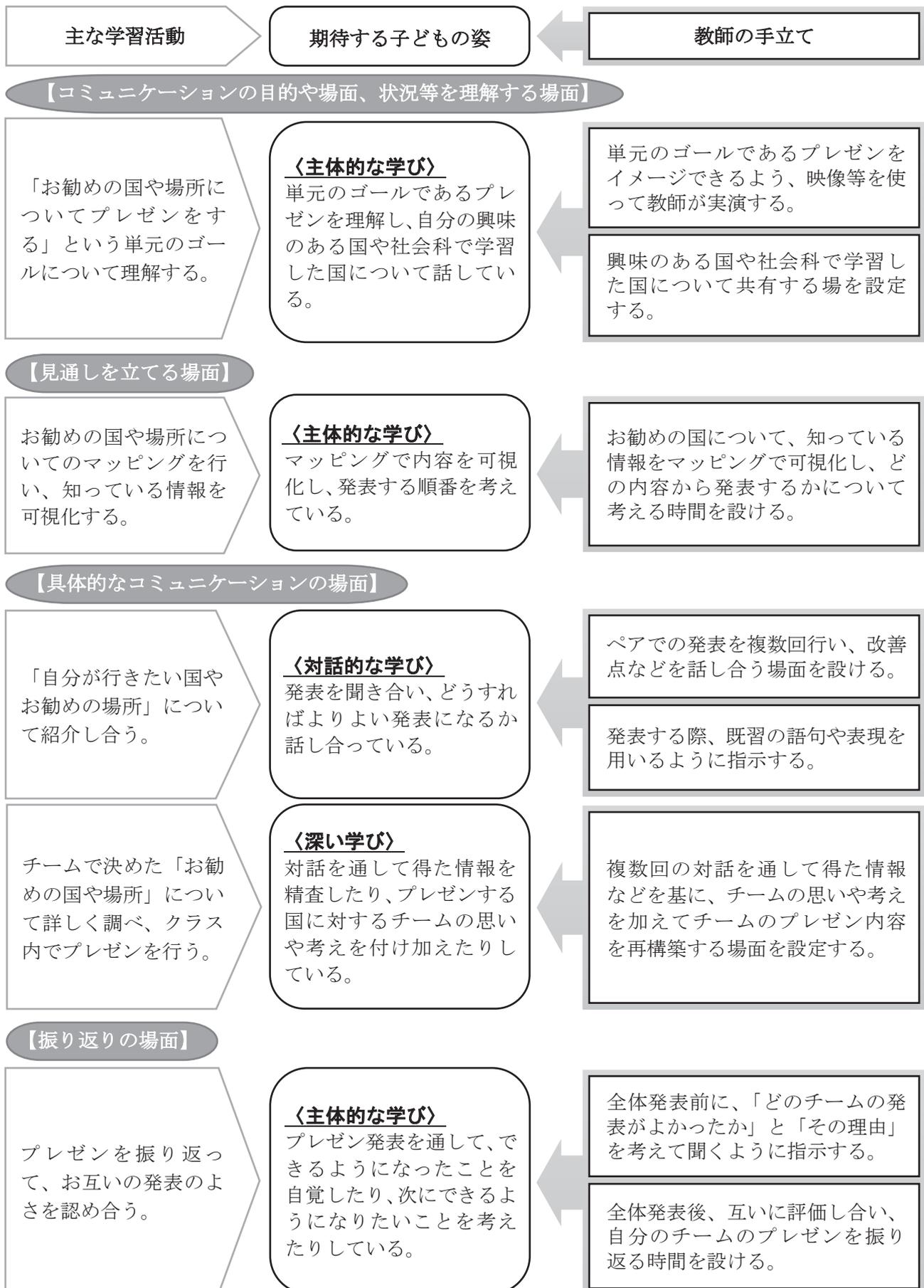
「対話的な学び」の視点で

自分が行きたい国やお勧めの場所に関して、その理由を、ペアやグループの友達に伝え合う場面を設定する。その際、自分の考えを広げることができるように、自分の考えと友達の考えを比較しながら伝え合うように指示する。また、自分の発表内容について、聞き手に伝わるように工夫されているかどうかについて助言し合う時間を設ける。

「深い学び」の視点で

対話を通してお互いの思いや考えを共有する中で、既習表現を確認したり、新出文法を確認したりしながら発表内容を再構築するよう促す。また、聞き手がその国に行ってみたいと思うようなプレゼンにするためには何を伝えるべきかを考えたり、全体構成や表現を工夫したりする時間を設ける。

3 授業改善の構想



4 実践の様子

ここでは、「お勧めしたい国や場所」について、相手を替えて行った複数回の発表で得た情報等を基に、発表内容を再構築するための指導の工夫について紹介する。

【具体的なコミュニケーションの場面で】

手立て

○学級を旅行会社に見立て、「お勧めの国や場所についてプレゼンをする」というゴールを設定した。

○よりよい発表内容にするために、大きく三つのステップを設定した。

STEP1

最終チームとは別の4人グループを構成し、生徒個人がお勧めする国についてマッピングした内容をペアで発表し合う。その内容に対してお互いにアドバイスをすることによって、自分の発表内容を再考する。グループ内の全員と、このやりとりを行う。

STEP2

最終チーム4人の中で、生徒個人がSTEP1を通して再考した内容で発表を行う。聞き手は、全員の発表後にどの国をプレゼンするのかを決定するために、メモを取りながら聞く。

STEP3

チームリーダーを中心に全員の発表内容を吟味し、クラス内プレゼンで発表する国を決定する。その際、英語で議論できるように進行用のカードを配付した。発表する国が決定した後、その国の情報のみならず、チームの思いや考えを加えながら内容を再構築する。

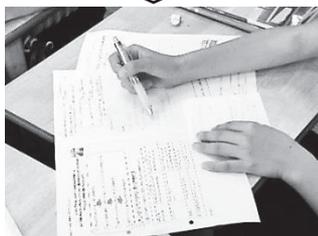
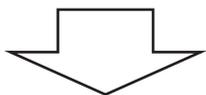


【教師による実演】

子どもの姿



【即興でのやりとり】

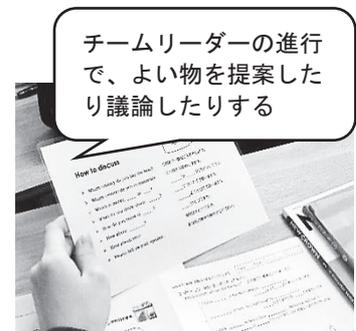


【説明を書き加える】

STEP1では、「〇〇も有名だよ」や「この表現が理解できなかった」などの声があがり、説明を加えたり、簡単な表現に訂正したりして発表していた。

STEP2では、発表内容が詳しくなったり、簡単な表現を用いたりして聞き手が理解しやすくなっていた。また、聞き手も最終決定に向けて、真剣に聞いていた。

STEP3では、進行用カードを活用し、英語で問答しながら一つの国を決定した。中には、チーム内全員の発表内容が魅力的だったため、一つの国に絞るのが難しいチームもあった。



【チームリーダーの進行で、よい物を提案したり議論したりする】

【進行用カード】

他にもこんな工夫を・・・

【コミュニケーションの目的や場面、状況等を理解する場面で】
興味や関心を高める工夫

諸外国に対する関心を高めるために、これまでに行ったことがある国や社会科で学習した諸外国の中で、興味のある国について共有する場を設定したり、「先生方のお勧めの国・行ってみたい国」について、世界地図とともに廊下に掲示したりした。

教師が訪れたことのある国を、ICTを活用して魅力的に紹介することで、「ICTを使って発表してみたい！」という声があがるなど、プレゼンに対する興味や関心が高まった。



【「先生方のお勧めの国」の掲示板】

【具体的なコミュニケーションの場面で】



【タブレット端末の使用】

よりよいプレゼンにするための工夫

プレゼン内容を効果的に伝えるために、チームごとにタブレット端末を配付し、活用することで、プレゼンする国についての追加情報を得たり、使用する画像を選んだりしていた。

聞き手が友達ということ意識させ、既習の語句や表現を用いるように指示したことで、辞書等で調べた難しい表現を簡単な表現に置き換えていた。

【振り返りの場面で】

学びを今後に生かす振り返り

全チームのプレゼン発表前に、「一番魅力的なプレゼンはどのチームか」や「その理由」を考えて聞くように指示した。発表後には、「〇〇チームは分かりやすい表現を使っていたので、次回プレゼンする時の参考にしたい」などの意見が出た。

プレゼンを行った感想の中では、「テーマに基づいたプレゼンをすることや、相手の立場に立って話をするのは、今後社会に出たときに役立つ」と考えた生徒が多かった。



【クラス内プレゼンの様子】

本実践を
通して



本事例では、最初に個人の「お勧めの国や場所」についてペアの相手に即興で伝えた後、相手から質問を受けることで、相手の知りたい情報を数多く入手しました。そのやりとりを複数の友達と繰り返すことで、発表内容が徐々に深まりました。その後、チーム内でプレゼンする国を一つに絞り、伝えたい思いや考えを付け加え、プレゼン内容を再構築することで内容がさらに深まりました。

授業実践 12 中学校 第3学年 外国語科（英語）

「ペアとの対話を通して、伝えたい内容を個人で再構築し、書いてまとめる事例」

単元名 「PROGRAM 6 Let's Talk about Japanese Things.」

単元のねらい

- ・ペア活動やグループ活動、発表において自分の意見を伝えようとしている。
(コミュニケーションへの関心・意欲・態度)
- ・「日本の文化」や「日本のお勧めの場所」について話したり書いたりすることができる。
(外国語表現の能力)
- ・教師や級友の発話内容や本文の概要を理解することができる。
(外国語理解の能力)
- ・現在分詞と過去分詞を用いた後置修飾の文構造を理解することができる。
(言語や文化についての知識・理解)

1 これまでの課題

これまでも、ペア活動を重視し、自分の思いや考えを伝え合う場面を多く設定してきた。しかし、表面的には活発に話しているように見えるが、自分の考えが深まっていないのが課題である。そこで単元のゴールとなる言語活動を設定し、そのゴールに向けて、使えそうな表現方法を考えさせたり自分の考えをもたせたりする時間を確保したい。また、即興でのやりとりを通して得た情報等を書く活動に取り入れることで、まとめる内容を充実させていきたい。

2 授業改善の視点《単元のねらいの達成に向けて》

「主体的な学び」の視点で

導入時において、「日本のお勧めの場所を紹介するガイドブックを作成する」という単元のゴールを見通すために、英語で栃木県を紹介しているリーフレットを掲示する。また、各単位時間の活動が単元のゴールであるガイドブック作成時にどのように生かせるのかを考え、書き留める時間を設ける。

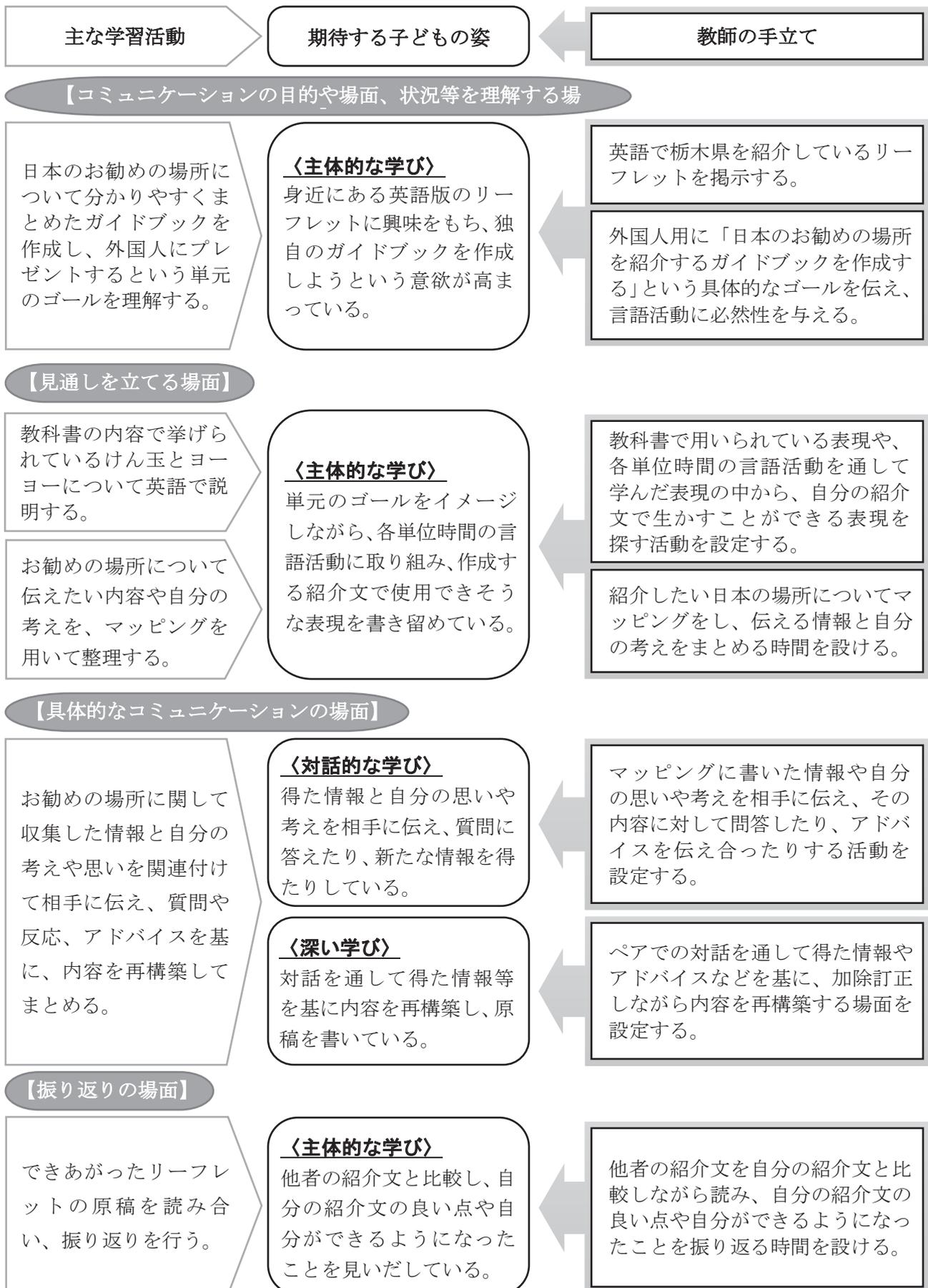
「対話的な学び」の視点で

「日本のお勧めの場所」についてのマッピングを用いて、即興で相手に伝える活動を設定する。その際、話し手が聞き手を意識し、相手の反応を見ながら自分の思いや考えを伝えるように指示する。その後、対話を通して新たな情報を得たり、伝わらなかった表現等を確認したりする時間を設ける。

「深い学び」の視点で

紹介文をまとめる際、来日した外国人に伝えるということを意識するようにする。また、友達との対話を通して得た情報やアドバイス等を基に、紹介文の内容を再構築する時間を設ける。その際、各単位時間で書き留めた既習表現等を活用して書くよう促す。

3 授業改善の構想



他にもこんな工夫を・・・

【コミュニケーションの目的や場面、状況等を理解する場面で】



〔単元のゴールを伝えている場面〕

言語活動の場面設定

目的を明確にし、意味のある言語活動にするために、2020年に東京オリンピック・パラリンピックが開かれる際に訪れた多くの外国人に、「日本のお勧めの場所」について分かりやすくまとめたガイドブックをプレゼントすることを提案した。

また、ゴールのイメージがしやすいよう、英語で栃木県を紹介しているリーフレットを提示した。

【見通しを立てる場面で】

ゴールに向けた言語材料の収集

教科書に取り上げられているけん玉について、相手に英語で伝える活動を行った。その後、教科書を読み、けん玉の説明文の中から自分の紹介文で使用可能な表現を探し、紹介文に取り入れる時間を設けた。

また、毎時間、言語活動を通して学んだ表現が「自分のお勧めの場所」の紹介文にどのように生かせるかを考え、書き留める時間を設定することで、書きたい内容を英作文する際に活用できる表現を蓄えることができた。



〔けん玉について説明している場面〕

【振り返りの場面で】



〔ガイドブックを読んでいる場面〕

完成した作品の評価

完成した作品（カラープリント）をファイルに入れ、ガイドブックを作成した。また、印刷したものを配付し、他の生徒の作品を読む時間を設けた。ペアで一緒に読み、内容や表現方法について意見交換をしたり、自分の原稿と比較したりすることで、良い点や改善点を見いだすことができた。

本実践を通して



本事例では、「日本のお勧めの場所を紹介する」というゴールを設定し、言語活動を通して学んだ様々な表現を紹介文のどこに生かせるかを書き留める時間を継続的に設定することで、子どもが常にゴールを意識しながら学習を進めることができました。また、マッピングを基に友達に即興で伝え、相手から新たな情報や深く知りたいことについてアドバイスをすることで、自分の考えがより深まりました。原稿を構成する際には、これまでに書き留めた表現を参照したり、辞書やインターネットを活用したりすることで、よりよい表現にすることができました。

◇ 参考文献

- ・独立行政法人教職員支援機構 次世代型教育推進センター 「資質・能力の育成を目指す主体的・対話的で深い学びのイメージ図」(平成30年)
http://www.nits.go.jp/jisedai/achievement/jirei/img/student_image_h30_2.pdf
- ・独立行政法人教職員支援機構 編著 「主体的・対話的で深い学びを拓く アクティブ・ラーニングの視点から授業を改善し授業力を高める」(平成30年) 学事出版
- ・田村学 「深い学び」(平成30年) 東洋館出版社
- ・遠藤真司・忰田康之・鶴巻景子 編著 「主体的・対話的で深い学びを実現する! 小学校国語科授業づくりガイドブック」(平成30年) 明治図書
- ・中村和弘 編著 東京学芸大学附属小学校国語研究会 著 「見方・考え方[国語科編]」(平成30年) 東洋館出版社
- ・澤井陽介 「授業の見方 『主体的・対話的で深い学び』の授業改善」(平成29年) 東洋館出版社
- ・奈須正裕 「『資質・能力』と学びのメカニズム」(平成29年) 東洋館出版社
- ・初等中等教育局教育課程課 「『主体的・対話的で深い学び』について ~『アクティブ・ラーニング』の視点からの授業改善~」『初等教育資料 平成29年5月号』 文部科学省
- ・寺本貴啓・後藤頭一・藤江康彦 編著 「六つの要素で読み解く! 小学校アクティブ・ラーニングの授業のすべて」(平成28年) 東洋館出版社
- ・教育課程研究会 編著 「『アクティブ・ラーニング』を考える」(平成28年) 東洋館出版社

◇ 研究協力委員

- | | | |
|--------------|----|-------|
| ・真岡市立真岡東小学校 | 教諭 | 大山 聡子 |
| ・那須烏山市立烏山小学校 | 教諭 | 佐藤 雅世 |
| ・益子町立益子西小学校 | 教諭 | 横田 正宏 |
| ・佐野市立旗川小学校 | 教諭 | 前田 敏恵 |
| ・那須町立那須高原小学校 | 教諭 | 宮下真之介 |
| ・上三川町立坂上小学校 | 教諭 | 高橋 範匡 |
| ・高根沢町立阿久津中学校 | 教諭 | 飯塚 奈々 |
| ・大田原市立若草中学校 | 教諭 | 大槻 光 |
| ・日光市立大沢中学校 | 教諭 | 花塚 正和 |
| ・栃木市立大平南中学校 | 教諭 | 小林 伸彦 |
| ・小山市立小山城南中学校 | 教諭 | 大高 知子 |
| ・那須塩原市立黒磯中学校 | 教諭 | 石井 宗宏 |

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善【実践編】

平成 31（2019）年 3 月

編集発行 栃木県総合教育センター

〒320-0002 栃木県宇都宮市瓦谷町 1070

栃木県総合教育センター研究調査部

TEL 028-665-7204 FAX 028-665-7303

URL <http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/>



本冊子は下の Web サイトでも御覧いただけます。

http://www.tochigi-edu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h30_jyugyokaizen/